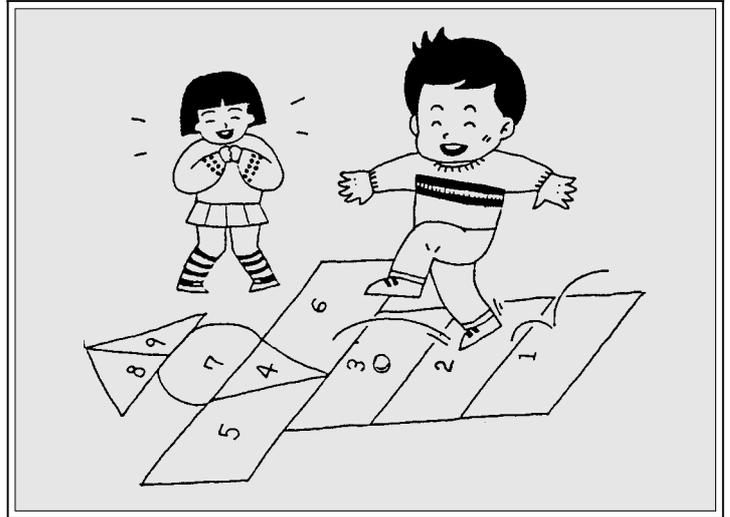


兵庫県のわらべ歌



遊びの歌

1. 手まり歌 (30曲)



わらべ歌のうち最もその量が多いのは、遊びの歌ですが、なかでも手まり歌とお手玉歌は数が多いようです。

手まりというと女の子の遊びという一種の常識がありますが、中世以来の蹴鞠に起源を発することを鑑みると、昔は男性も遊んだものであったといえます。

1. あんたがたどこさ

あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ
熊本さ 熊本どこさ せんばさ
せんばやまには狸がおってさ
それを獵師が鉄砲で撃ってさ
煮てさ 焼いてさ 食ってさ
それを木の葉でちよいとかくす

(川西市)

出典 ふるさとの唄
加西市教育委員会編

あ ん た が た ど こ さ ひ ご さ ひ ご ど こ さ
く ま と さ く ま と ど こ さ せ ん ば さ せ ん ば
や ま に は た ん び が お っ て さ そ れ を り ょ う し が
て つ ぱ で う っ て さ に て さ や い て さ く っ て さ
そ れ を こ の は で ち ょ っ と か く す

現在でも日本各地で歌われている代表的な手まり歌に、“あんたがたどこさ”があります。全国的に替え歌も多く、兵庫県でもバラエティにとんだものが見られます。この歌は、わらべ歌に多い「連鎖発想」ともいふべき、しりとり歌を基調としています。

あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ
熊本さ 熊本どこさ えんまさ
えんま山奥狸がおってさ
それを獵師が鉄砲で撃ってさ
切ってさ 煮てさ 食ってさ
お茶の子さいさい

(千種町)

あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ
熊本さ 熊本どこさ えんまさ
えんま山には狸がおってさ
それを獵師が鉄砲で撃ってさ
ちってさ 煮てさ うまかったとさ

(三田市)

2. 一番最初に

一番最初に一の宮 二で日光東照宮
三で讃岐の金毘羅さん 四で信濃の善光寺
五つ出雲の大社 六つ村々地蔵さん
七つ成田の不動さん 八つ高野の弘法さん
十で所の氏神さん
これほど信心したならば
浪さんの病気も治るだろう
ゴーゴーゴーという汽車は
浪子と武男の別れ汽車
二度と逢えない汽車の窓 泣いて血を吐く

ほととぎす

(赤穂市)

「序数発想」ともいうべき数を中心として展開するもので、手まり歌やお玉歌、手合わせ歌に数多く伝承されています。

この歌も全国的に伝播していて、兵庫県でもバラエティにとんだものが見られます。曲はルルー(フランス)作曲の「抜刀隊」です。

これほど信心...以下は、明治後期にベストセラーになった徳富蘆花の「ホトトギス」の話の中から、当時の「のぞきからくり」などの見世物の語りに影響を受けたものと考えられます。

一で天照皇大神 ... 六つ昔の六角堂
七つ浪速の天神さん
八つ八幡の八幡さん 九つ神戸の楠公さん
(加西市)

... 二でニニギノミコトノリ
... 七つ奈良の春日さん
八つ大和の八幡さん ...
(八千代町)
一番始めは一の宮 十で東京二重橋
(篠山市)

..... これまで信心したならば
浪ちゃんの病気も治るでしょう
ゴーゴーと音 汽車は
浪ちゃんと武夫さんの別れ汽車 ピッピー
(北淡町)

..... 父は陸軍中将なり
長女に生まれし浪子嬢 浪子は肺病で床の中
武夫は満州で弾の中 武夫が寝台に寝る時に

ぐっすり眠ったその上に
浪子の死んだ夢を見て はっと驚き目に涙
戦い終わりにて帰り道
はるか向こうを眺むれば
浪子に良く似た女学生 桃子は武夫の妻になり
二人は出て行く散歩道

(千種町)

3. 一かけ 二かけ 三かけて

一かけ 二かけ 三かけて 四かけて
五かけて 六かけて
橋の欄干腰を掛け 遥かかなたを眺むれば
十七、八のねえさんが
片手に花持ち線香持ち
ねえさん ねえさん どこ行くの
わたしは九州鹿児島 西郷隆盛娘です
明治十年三月三日
切腹なされた父上の お墓参りに参ります
お墓の前で手を合わせ
南無阿弥陀仏と唱えれば
線香の煙が ひーや ふーや みーや
よーや いーや むーや
なーや こーや
とうとう一献つきました

出典 ふるさとの唄
加西市教育委員会編

いちかけ 二かけて さんかけて しかけて
じゅうしち はちの ねえさんが ねえさん
ごかけて はしを かけて はしの らんかん
せんこを てにちつ て ねえさん ねえさん
こしをか け はしを おこうを ながむれば
どこいく の わたしは きょうしゅう かごしまの
さいごう なかまり むすめで す めいじ
じゅうねん さんがつ みつ か せつぶく なきつた
ちちうえ さまのお ほかまいりで ごごい
す おほかの まえで てをあわせ
なんまい だぶつと おがみます

“一番始めに”と同じく「序数発想」ともい
べき数を中心として展開するもので、手まり歌や
お玉歌、手合わせ歌に数多く傳承されています。

この歌を採集された津名郡一宮町の浜岡きみこ
先生は、ゴムマリは当時高価で、なかなか庶民に
手に入りづらく、一個のマリを皆で交代でついた
際、周りで見っていた子ども達が円になって座って
この歌を唄ったと語ってくれました。

かけこかけ 三かけて
石の地蔵さん肩かけて ……

… 南無阿弥陀仏と目に涙
(加西市)

… お墓の中から魂がふわりふわりと
ジャンケンポン
(城崎町)

… お墓の前には幽霊が
ゆらりゆらりとゆれている
(明石市)

4. 上がり下がり明石町の

あぁがり さぁがり 明石町の
こくせん紺屋の こことうお
ここは高砂ほろろ池 ほろりとほりやげて
なんじゃいな
とうおえ 二十え 三十え 四十え 五十え
六十え 七十え 八十え 九十え
百に足らしてまいこのこ
(加古川市、高砂市)

出典 めんめらの生きた道
採譜 山本 嶺一

あ が り さ ー が り さ か し ま ー ち の
こ く せ ん こ ん や の こ こ と う お
こ こ は た か さ ほ ろ ろ い け
ほ ろ ろ と ほ り や げ て な ん じ ゃ い な
と う お え に じ ゃ う え
さ ん じ ゃ う え し ー じ じ ゃ う え
く ー じ じ ゃ う え
ひ ち じ じ ゃ う え
ひ ー く に た ら し て ま い こ の こ

とうおえから九十えまでは足の下をくぐらした
と、磯野道子著「めんめらの生きた道」(播磨書
房)にありました。

この歌は東播磨地区からのみの採集となりました。

上がり下がり 明石町の
こくせんこんにやく こんべいと
ここはさかさのほろほろいち
ほろるとほりやげて なんじゃいな ……
(加古川市)

上がり下がり 明石町の
こくせん紺屋の こことうお
ここは高田のほろの池
ほろるとほらげて なんなんえ
(加古川市)



5. えべっさん 大黒さん

えべっさん 大黒さん
一に俵ふんばって 二ににっこり笑ろうて
三に酒つくって 四つ世の中よいように
五ついつものごとくに 六つ無病息災に
七つ何事もないように 八つ屋敷を広げて
九つここに家建てて 十でとうとう納まった
(加古川市)

この歌も今回は東播磨地域からのみの採集とな
りましたが、全国共通に唄われている歌のよう
です。そもそもこの歌は、年頭に大黒の面をつけ、
宝の槌を持ち、歌舞を奏して家々を巡り、お金
を乞うた芸人によって歌われていたといわれてい
ます。

えべっさん 大黒さん
一に俵ふんまえて 二ににっこり笑ろうて
三に盃さし上げて 四つ世の中よいように
五つ出雲の大社
…… 九つところに倉建てて ……
(加西市)

6. 一刃の一助さん

一刃の一助さん

いの字がきらいで 一万一千一億

いといとまとまのお札を納めて

二刃に渡した

二刃の二助さん への字がきらいで

二万二千二百億

にとにとまとまのお札を納めて

三刃に渡した

・・・(以下十刃までつづく)

(美 方 町)

通りゃんせ

六刃の六助さん ろうそく買いました

通りゃんせ

七刃の七助さん 菜っ葉買いました

通りゃんせ

八刃の八助さん はっさく買いました

通りゃんせ

九刃の九助さん きゅうり買いました

通りゃんせ

十刃の十助さん 重箱買いました

通りゃんせ

(加古川市)



7. ひいふの三吉

ひいふの三吉 昼は馬追い 夜は沓うち

お姫さんがた どうでしばらく

山の紅葉を 春と眺めて 五軒茶屋の

おとやこんばん お花やききょうや

おいて育てて 育てておいて 朝ま疾うから

赤べべ いわずに

いまのこしらえて 稲荷山まで 送った

稲荷山の あれ向こうの

これ向こうの 向こうとなりの

やたまたづくしの 白壁づくしの

お杉女郎に送った

そうりゃ先方 受け取り申し そうろうや

お姫さんがた どうでしばらく

山の紅葉を 春と眺めて 五軒茶屋の

おとやこんばん お花やききょうや

おいて育てて 育てておいて 朝ま疾うから

赤べべ いわずに

いまのこしらえて 稲荷山まで 送った

稲荷山の あれ向こうの

これ向こうの 向こうとなりの

やたまたづくしの 白壁づくしの

お秀女郎に送った

(村岡町)

リズム本位の手まり歌で、全国に伝播しています。

この歌も兵庫県内各地に様々な歌詞があります。

... いとう いとう いとうまに ...

(西脇市)

... 一万一千一百石一斗一斗一斗まのお倉に ...

(赤穂市、篠山市)

... 芋屋は休みで

いっといっといっまとまに お札を納めて

あっちんちのおおやけど

(尼崎市)

... 一万一千一百石一斗一斗一斗まめお倉に ...

(姫路市)

一刃のいんすけさん

(豊岡市)

一刃の一助さん 芋買いました 通りゃんせ

二刃の二助さん 肉買いました 通りゃんせ

三刃の三助さん 酒買いました 通りゃんせ

四刃の四助さん 羊羹買いました 通りゃんせ

五刃の五助さん ごんぼ買いました

かかは かなべ
すってんとんよ とんよ とんよ とんよ
(北 淡 町)

ひいふの三吉 昼は馬追い 夜さりや藁から
わらんじづくり
りっぽうはっぽうはりやはなし
小池の千鳥、千鳥の花が 咲いたか
咲かんか阿弥陀坊さん杖ついて通らんせ
とっけもない ここちょっと
のかんせ のくことなりません
(伊 丹 市)

8 . どんどんたたくは

どんどんたたくは 誰さんじゃ
新町米屋の 姉さんじゃ
何しにここまで おいでたか
雪駄がかわって 替えに来た
どんな雪駄でございます 紫鼻緒の 上雪駄
そんな雪駄はございません
あってもなくても あけてんか
ますます一たん 貸しました
(黒田庄町)

近松門左衛門作の浄瑠璃「丹波与作待夜の小室節」の馬追い三吉を歌ったもので、京都を中心に歌われ始め、畿内各地に伝播したといわれます。様々な歌詞がありました。

... お姫様とは 道中のすごろく
振って負けても かまやせぬ かまやせぬ
鎌倉行きしもどり
椿一本6月7日 その椿
色よい椿 花が咲いても 実がのらぬ
(佐 用 郡)

ひいふの三吉 昼は馬追い 夜はわらかち
わらじょりつくる
あいやぽんぽん うちの丁稚は 酒飲み丁稚
酒の肴に いわし買うて
焼いて 焼いてこんがらがして
戸棚に入れて 猫に引かれて
猫をおわえまわして
しきん 敷居 でけつまづいて
すってんとんよ
とんよ とんよ とんよ とんはとんなべ

この手まり歌もほぼ全国に及んでいます。特に関東以西には多いようです。

「新町米屋の姉さん」のくだりが各地方によって様々で、四国の徳島市では「新町横町の長右衛門さん」となり、岐阜では「新町横町の利平さん」、山口では「新町米屋の義兵衛さん」などとなっているそうです。

とんとんたたくは 誰じゃいな
新町米屋のぎへいさん
あなた今頃何しに おいでたか
せきだがかわって 替えに来た
どういせきだでございます
むらさきはなごの ちょうせきだ
そんなせきだはございません
あつてもうても かえてんか
そりゃそりゃむりじゃ そりゃむりじゃ
(津名郡一宮町)

この歌を採集された浜岡きみこ先生は、「せきだ」とは雪駄のことで、竹の皮で作った草履。竹の皮を細く裂いて草履にすると強いと教えてくれました。

9. ひいふのあねさん

ひいふのあねさん 十四で嫁入り
しろく二十四で子が出来まして
去ねとおっしゃりゃ 去にますけれど
もとの十四に しておくれ しておくれ
(山東町)

この歌を採集された温泉町の長谷坂栄治先生は、「この歌の伝承者は明治三十年代生まれの方々に、当時まだゴムマリはまだ移入されず、糸手まりで

遊んだ。糸手まりはあまり弾まず、縁側や廊下に座って息をせきながらついたという」と採集された時の様子を著書で語っておられます。

ひいふのあねさん お供がないとて
あなずりなさる
伴は丹波の助一様よ 助の土産に何々もろた
一に京箸 二におしろい箱
三にさしぐし 四に紅まくら
あげて一番か～たびら
(加古川市)

一二三四みよの姉さん 十六で嫁入り
よめりしそめてはや子ができて
いねとおっしゃら今でも帰る
もとの十六にしてかやんせ
京から坂から村の若い衆が四、五人みえる
じょりもはかんとはだしでみえる
わたしのはいとるやぶれじょりかたし
あげしか進じよか
殿がないとて侮りなさる 殿は丹波の助一様よ
助の土産は何々もろうた
一に香箱 二におしろい箱
三にさし櫛 しののめの枕あげて
一番かたびら 肩と裾とは
れんげ はんげの梅の折枝
中はごでんの袖はし そうではしとは
どこで聞こえた
有馬街道の茶屋の娘がにほんてかけと聞こえた
聞こえたからこそ一つでは乳を飲み初め
二つでは乳口はないて 三つでは水を汲み
そめ 四つでは用事聞きそめ
五つでは糸を繰りそめ 六つでは機をおりそめ
七つでは七つながらのおさを入れそめ
八つではきんらん織りそめ
九つではここの紺屋へ嫁入りしそめて
十で殿御と寝そめた
十一では花もようさく
じさん ばさんの 世話になるから
スッテントン とんと豆腐屋の縁の下から
水が出てきて
ごばん小袖を流いた
流すほどならわしにくれたら

銭の百両もやるのに

(小野市)

この歌の後半は、次に上げる別の手まり歌「乳を飲みそめ数え歌」が付け足されているのがわかります。

10. 乳を飲みそめ数え歌

一つでは乳を飲み初め 二つでは乳をはなれて
三つではじょじょをはきそめ
四つでは一人遊びなしゃんす
五つでは管を巻きそめ 六つでは機をおりそめ
七つでは木綿機織り
八つではきんらんどんすを織りそめ
九つでは嫁入りしそめ 十で殿御と寝そめた

(香住町)

那智山お山はあたたかに 響こうかいな
三つとや 見るよりおゆみが走り出て
盆にしらげの志 進上かいな

四つとや ようよう西国まいらんす

定めて道中は親御達 同行かいな

五つとや いえいえ私は一人旅

トトさんカカさん顔知らず 逢いたいわいな

六つとや 無理矢理押しやりはなむけを

たらし取らせる親心 かわいいわいな

七つとや 泣く子を抱いたりすかしたり

なだめて見送る母心 いとしいわいな

八つとや 山越し谷越し観音堂

ここまでたずねてきたわいな さびしいわいな

九つとや 九つなる子の手を引いて

じゅうろべえ館の表口 はいろうかいな

十とや 十にもならぬ幼子を

わが子と知ったら十郎兵衛が 殺そうかいな

(但東町)

11. 巡礼おつる

一つとや 柄杓と笈摺 杖に笠
巡礼姿で父母を たずんようかいな
二つとや 補陀落紀州は三熊野の

この歌は、近松門左衛門の「夕霧阿波の鳴渡」に榊原孝雄の事件を組み合わせて阿波徳島のお家騒動に脚色したもので、近畿を中心として全国に伝播した江戸時代の手まり歌です。

柄杓とは巡礼が米銭などの施しをうけるために持っている道具のこと、おいずりは巡礼が着物の上に着るひとえの袖なし羽織、また、しらげとは白米のことです。

ひとめに笈摺つりに笠

巡礼姿で父母を たずねよかいな

補陀落紀州は三熊野の

那智山お山は音高き 響こうかいな

見るよりおゆみが走り出て

盆にしらげの志 進上かいな

ようこそたずねてござんした
 さだめしおつれは親御達 同行かいな
 いやいや私は一人旅
 トトさんカカさん顔知らず 逢いたいわいな
 無理矢理おっしゃるはなむけを
 しょうしょうばかりの志 進上かいな
 泣く子を抱いたりすかしたり
 あちらやこちらへ見送って いなそうかいな
 山坂笈坂観音寺
 はるばる尋ねてきた娘 いなそうかいな
 九つなる子の手を引いて
 じゅうろべえ館へつれていて 殺そうかいな
 トトさん知らずに殺されて
 十郎兵衛 わが子であったかと
 かなしいわいな
 いちいちわたしが悪かった
 こらえておくれやおゆみさん
 西を向いては手を合わせ
 東を向いては手を合わせ観音様に頑かけて

(篠山市)



12. うちの裏のちしゃの木に

うちの裏のちしゃの木に
 すずめが三羽とまって
 一羽のすずめの言うことには
 むしろ三枚 ござ三枚
 あわせて六枚 敷き詰めて
 ゆうべ迎えた 花嫁さん
 襟もおくみもようぬわん
 そんな嫁なら去んでくれ
 明石の浦まで 送って

(津名町)

この歌は、全国的に伝播しているものですが、多くは子守唄として歌われています。ちさの木はエゴノキの東北地方の方言です。

もともと、伊達騒動を脚色した歌舞伎「伽羅(めいぼく)先代萩」の御殿の場で、乳母の政岡が鶴喜代のために飯を炊く間に、息子の千松がうたう「雀の歌」から出ているものといえます。県下各地様々な歌詞があります

うちの裏のちしゃの木に
 すずめが三羽とまって
 一羽のすずめの言うことには
 むしろ三枚 ござ三枚
 あわせて六枚 敷き詰めて
 よんべよんだ 花嫁に
 金襴緞子を縫わしたら
 襟とおくみをようつけんで
 となりのばばさんに笑われて
 門に出てはしくしくと
 裏へ出てはしくしくと
 何が悲して泣きなさる 何も悲しいはないけれど
 わしの弟の千松が 七つ八つから金山へ
 金が出るやら出ないやら

一年経ってもまだ帰らず
二年経ってもまだ帰らず 三年三月の九日に
江戸におるとの状が来て
状の上書読んでみしょ 大きい刀は父さんに
小さい刀は母さんに
金の千両はばばさんに
金の千両で倉建てて 倉のぐるりに松植えて
松の小枝に鈴つけて

鈴がじゃんじゃんなるときは
連れて参るか千松をの 千松を
おっと確かに受け取りました
ここに今日 天気はよろし
筆もいらん すずりもいらん
お花開きの お受け申して
となりのとなりのこちのとなりのおさんじょう
さん
お袖の下から お袖の上まで
ちよいと一卷 ちよいと一卷貸しました
(篠山市)

おっと確かに...からはマリを受け渡しします。
必ず歌いながらマリをつきます。

うちの裏のちしゃの木に
すずめが三羽とまって
一羽のすずめの言うことにゃ
爺さん婆さんせかんすな
私が十六になったなら 城山崩して 堂建てて
堂のぐるりに 松植えて 松の小枝に鈴さげて
鈴がちゃんちゃんなる音は
キジかおかめか 鶉の鳥か
あけて見たれば ごぜん鳥 ごぜん鳥
(加古川市)

13. あんたどこの子

あんた どこの子 お寺の裏の子
夢見たように
大阪姉さん べっぴんさん
京都の姉さん どうどすえ
ちいさいねえさん どっこいしょ
(千種町)



大阪姉さん...からは様々なゼスチュアを入れな
がらマリをつきます。

... お寺の裏の子 よーにた よーなか
おさかてんのべっぴんさん
鹿児島姉さんどっこいしょ

(温泉町)

あの子どこの子 お寺の裏の子
夢見たように
大阪姉さん べっぴんさん 京都の姉さん舞子
姫路の姉さん バレー 田舎の姉さん たんぼ
(相生市)

14. よもの景色

ひい ふう みい よう
よも(四方)の景色を春と眺めて
梅にうぐいす ホウホケキョとさえずる
あすは祇園のむけちよるめの
琴や三味線 四条で帯買うて
三条でくれて くけたくけ目に 金礼つけて
夜のばんばん 遊びにいてや
夜の若い衆が 帯び引きなさる
そないなさるな 帯切れまする
帯は切れても つなごとらくや
縁が切れたら つなぐことできん
ここで一番 勝ちました 勝ちました

(佐用町)

1753年江戸中村座で、元祖中村富十郎が江戸く
だりの初お目見えに踊った

「京鹿子娘道成寺」の中で白拍子花子が、毬唄
につれて明るく踊ったものです。

江戸時代から明治にかけて流行し、各地方に伝
播する間に様々な歌詞に変化したものといえます。

ひい ふう みい よう
よも(四方)の景色を春と眺めて
梅にうぐいす ホホウ ホケキヨとさえずって
梅と桜は匂いはんがん
あした北野の天神さんで 梅と桜をあげたなら
梅はすいてと申されました
桜はよいとてほめられた
それで一献かしました
めでたいなお盃 さあさあこれから
となりの白壁づくりの さんにお渡し申~す
(東浦町)

九でよいのは 薬屋の娘
十でよいのは 床屋の娘
みんなよい娘 でござる

(竜野市)

15. 西宮から

西宮から 五人連れで
一でよいのが 糸屋の娘
二でよいのが 肉屋の娘
三でよいのが 酒屋の娘
四でよいのが 塩屋の娘
五でよいのが 呉服屋の娘
呉服かたいで えささの道で
鼻緒が切れて どうしょう こうしょう
ちょっと 一たん貸せました
(千種町)

藩政時代から唄われている歌です。小寺玉晁著の「尾張童遊集」(天保2年)には、岡崎の手まり歌として「坂だんだんあがってみれば よい子よい子が三人通る 一によいのが糸屋の娘 二によいのが二の屋の娘...」があって、古い伝承がうかがえます。

姫路のお城は 名高いお城で
一段上がって 二段上がって 三段上がって
四段上がって 五段上がって 向こう見れば
一によいのは 糸屋の娘
二でよいのは におやの娘
三でよいのは 酒屋の娘
四でよいのは 塩屋の娘
五でよいのは 呉服屋の娘
六でよいのは ろうそく屋の娘
七でよいのは 質屋の娘
八でよいのは 箱屋の娘

京都では、歌いだしが「名古屋の城は高い城で...」となっているそうです。

あっちの山から こっちの山から
きれいな姉さん 五人連れで
一でよいのが 糸屋の娘
二でよいのが 人形屋の娘
三でよいのが 酒屋の娘
四でよいのが 新聞屋の娘
五でよいのが 呉服屋の娘
六でよいのは ろうそく屋の娘
七でよいのは 質屋の娘
八でよいのは 八百屋の娘
九でよいのは 薬屋の娘
十でよいのは 時計屋の娘
受け取った 受け取った
さんやのさかづき 受け取った

これからどなたに 渡しましよ
 うちの裏の白壁づくしの お姫様に
 渡しましよ 渡しましよ

(佐用郡)

16. こくせん今夜は

こくせん今夜はこことまれ
 ここは丹波のほろろいち
 あんぐり じゃんぐり
 ひ～よひよ ひよひよ車に 十乗せて
 二十のして 三十のして 四十のして
 五十のして 六十のして 七十のして
 八十のして 九十のして 百のして
 百目のところで 舞子の子

(千種町)

この歌は、「揚げまり」の歌として長谷坂先生が収集されています。「揚げまり」とは、手まり遊びの草創期、数人の男女が向かい合い、まりを突き揚げていた遊びのことをいいます。

17. わしの大事な

わしの大事なおてまるさんを
 紙に包んで文庫へ入れて
 お錠でおろして お鍵であけて お鍵でおろす
 おてての下から お渡し申すが 合点か
 おっと確かに受け取りました

(篠山市)

唄 前川たか
採譜 前川澄夫

♩ = 108

わしのだいじな おてまるさんを かみにつつんで
 ふんこへいれて おじやおろして おかぎであけて
 おかぎでおろす おててのしたから おわたしもうすが
 がてんか おおとたしかにうけとりました

物語風の叙事歌としてかなり古くから伝承されているものといわれています。

西日本地方に広く残っているもので、古いところでは前述の「尾張童遊集」に、手まり歌として「大事の大事のおてまる様を、紙で包んで紙縫りで締めて、締めた所にイロ八とかいて…」と記載されています。

18. うちの丁稚

うちの丁稚は 酒飲み丁稚
 酒の肴に いわし買うて焼いて
 焼いてこんがらがして 戸棚に入れて
 猫に引かれて 敷居で毛躰いて
 すってんとんよ とんよ とんよ とんよ

(北淡町)

この歌は、もともと江戸時代・天明期から幕末にかけて全国的に流行した「新保広大寺節くずし」という飴売りの歌だったといえます。

山形県では歌いだしを「おらが殿様」としますが、地方によって「おらが父様」「うちがばあ様」「おらのあねさん」など様々です。

爺さん寒いか するめ買うて来て
 焼いてこんがらかして
 棚に置いたら 猫がとるとて スッテントン

(加古川市)

隣の爺はいやしい爺で
 いわしを焼いて 紙に包んで ほっぺへ入れて
 さあさ 上の子ども衆 下の子ども衆
 花見に行こう
 花はどこ花 地蔵の前の 桜花

一枝折れば パツと散り
 二枝折れば パツと散り
 三枝の坂で 日が暮れて
 上の旅籠にとまろうか 下の旅籠に泊まろうか
 中の旅籠に泊まったら
 むしろは はしかいし
 夜は長いし のみは食いつく 蚊はせせる
 (千種町)

参考 おらが殿様
 (山形県)

♩ = 120 出典 新編わらべ唄風土記

おらがと のきま や きも ち す きで
 むん べ こ こ の つ け き ま た な なつ
 ひ と つ の こ し て た も と に い れ て
 う ま に の る と て ほつ たら や と お と し
 ひ ろ う も は ず か し し ひ ろ わ ね も く や し
 は ね が あ っ た ら は ね が れ や き も ち
 あ し が つ い た ら と び あ が れ や き も ち

19. とんとんとうだけ

とんとんとうだけ ひびき山だけ
 向かい通るは せつろうでないか
 鉄砲かついで 雉うちなさる
 雉はケンケン 鳴かねば撃てぬ
 撃てぬ拍子に 船乗りなろうた
 舟はどこへついた 大阪の川へ
 大阪土産に 何々もろうた
 一に京箱 二におしろい箱
 三にさし口 四にしのみくら
 一番あげて 聞こえた ちょうど
 一献つきました
 (西淡町)

この歌を採集された浜岡きみこ先生は、ゴムマ
 リができるまでは、糸まりで遊んだと語ってくれ
 ました。糸まりは、色の糸でかがって作り、模様
 は亀甲、三階菱、こぐり菱などがあったといいま
 す。主に祖母が孫のために作るものだったようで
 す。現在は、糸まりで遊ばないから歌も忘れられ、

わずかに、お正月神棚に供える柳の小枝に昔作っ
 た糸まりをつけているのが見られるといえます。
 せつろうとは鉄砲うちのことです。

この歌の後半は、前述した別の手まり歌「一二
 のあねさん」が付け足されているのがわかります。

20. 花の都の

花の都の真ん中の 郵便箱の申すでよ
 さても忙がし 我らほどに
 せわしきものは またあらじ

朝はひき明 夜は夜更けまで
 出でる飛び出る そのわけたてに
 ぱったりぱったりぱったりこを
 さしいで 富士のやすみなし

(篠山市)

21. いちりったら

いちりったら らっとげっとし
 しんがらほけきよの たかちほよ ちょんがめ
 (加古川市)

22. いもいもにんじん

いもいも いもいも 人参人参 いも人参
 さんしょさんしょ いも人参さんしょ
 しそしそ いも人参さんしょ しそ
 ごんぼごんぼ いも人参さんしょ しそごんぼ
 どんぐりどんぐり いも人参さんしょ
 しそごんぼどんぐり
 ななぐさななぐさ いも人参さんしょ
 しそごんぼどんぐり ななぐさ
 蛤 蛤 いも人参さんしょ
 しそごんぼどんぐり ななぐさ 蛤
 栗 栗 いも人参さんしょ
 しそごんぼどんぐり ななぐさ 蛤 栗
 重箱重箱 いも人参さんしょ
 しそごんぼどんぐりななぐさ 蛤 栗 重箱
 (小野市)

いも 人参 さんしょ しそ ごんぼ

テテ親に半枚 母親に半枚 あと三枚残って
お師匠はんの前で いろはと書いて
とんどにあげて とんどの道でけんかができて
そこ わけわけと 明くる朝見れば
手のない鳥と足のない鳥と ...

(加古川市)

一ごろ 二ごろ 三ごろ 十ごろ
豆腐屋のあねさん 子を四人産んで
一人の子はお茶屋へやって
茶の着物着せて お茶お茶お茶と
もう一人の子は紅屋へやって
紅のべべきせて 紅紅紅と
もうひとりの子は 漆屋へやって
うるしに負けて おぎゃおぎゃおぎゃと
も一人の子は 紙屋へやって
紙半帖もろて 男に半枚 女ごに半枚
半枚ずつ分けて
お師匠さんの前で いろはと書いて
とんどにあげて
とんどの道でけんかができて 明日の朝見れば
尾のない鳥と 足のない鳥と 手桶を下げて
おんばコツコツ 南無阿弥陀仏

(高砂市)

一ごろ 二ごろ 三ごろ 十ごろ
豆腐屋のおみつさん 三つ子を産んで
一人の子は漆屋へやって
うるしにまけて うろうろうると
も一人の子は茶碗屋へやって
茶碗一つめんで 茶碗茶碗茶碗と
も一人の子は 紙屋へやって
紙三枚もろうて テトヤに半枚 八ホヤに半枚
あと二枚残って お師匠さんの前で
名古屋の城は 高い城で

(佐用郡)

28. 忠臣蔵数え歌

一つとせ 人を見下す師直が
かわえ御前に恋慕して 渡そうかいな
二つとせ 深い編笠虚無僧が
刀のせの手の内ご無用と 止めようかいな
三つとせ 身の上知らずの九太夫が
主人の遠夜に蛸魚 はさもうかいな

四つとせ 夜討ちの面々打ち揃い
山と川との合言葉 忍ぼうかいな
五つとせ 猪撃たんと勘平が
狙い定めた二つ玉 はなそうかいな
六つとせ 無理な判官ご切腹
師直切り立て御殿から 騒ごうかいな
七つとせ なむさんきたうで由良之助
力弥が鯉口さんさんと 遊ぼうかいな
八つとせ 屋敷長屋は長者まで
玄関長屋で芝部山 たづにようかいな
九つとせ 九つ梯子をさしかけて
お軽を後から無理矢理に おろそうかいな
十とせ とうとう敵を討ち取って
めでたく主人の塚の前 まつろうかいな

(千種町)

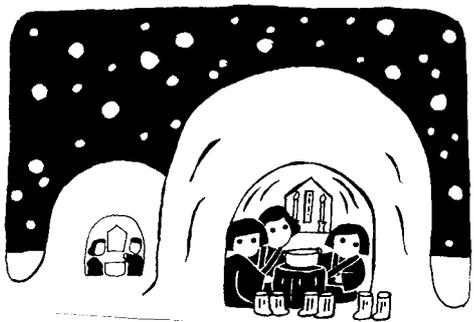
歌舞伎狂言「忠臣蔵」に取材した手まり歌です。
竹田出雲の浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の歌舞伎化は、大阪では1748年であったことから、この歌が成立を見たのも1750年のあたりのことだといわれます。

29. よんよんにっしょか

よんよんにっしょか もりか
うどん屋の子が心中をしたか
嘘かほんまか まことの事が
もうし姉さん 男はないか
男 淡路の米屋の番頭 字もよう書く
算盤も器用な 器用な男に 逢いそめられて
(ここからは曲が変わる)
ここで死のうか 役場の前で
羽織ぬごとて ヨイヤサ ヨイヤサ
一の丹衆に 二の丹衆 三の丹衆に止められて
おかさおかさと 気を誉められて
「春は世間の墓参り 墓の後ろに 鳥がいて
鳥は何ゾと こうこうと」

自然の歌

14. 季節、天候の歌（15曲）



私たちの国は、古来より二十四節気といわれる変化の富む季節のなかで、豊かな自然を育んできました。

古今和歌集にも藤原敏行の短歌で、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（巻4、秋上、一六九）とあるように、季節の変化を音でも敏感に捉ることができる素晴らしい文化を保有しています。

わらべ歌の世界でも、季節や天候の変化を唄った歌が多数残されているのは、子どもたちの遊びの世界に密着していたからであろうと容易に推測することができます。

1. 一人でさびし（春の歌）

一人でさびし 二人でまいりましよう
みわたす野辺は よめなにたんぼぼ
いもとのすきな 紫すみれ
菜の花咲いて やさしい蝶々
ここへとまねく とまっておいでなさい

（加東郡）

2. 面白いのは（春の歌）

面白いのは五月の田植
猫のほほかむり 後にじり

（小野市）



3. 雨ごいたまごい（夏の歌）

雨ごい たまごい じゅうごいの
雲に しずくもないのかい

（加古川市）

出典 めんめらの生きた道
採譜 山本 嶺一



田植えの時期に、雨を呼ぶ行事として、「雨乞い」がありました。唐傘を逆さに上向けて、木や竹など燃えるものを入れ、祈祷してからたいまつみたいに燃やして振り回す、という行事です。その時に唄ったと上掲の「めんめらの生きた道」に紹介がありました。

りゅうごいとは「竜乞い」で、雨を司る竜を呼んだという説や「十合」で、池の満水を意味するなどの説があります。

雨乞い給え りゅうごうの雲に
しずくも ないのかい

（加古川市）

4. 照る照る坊主（夏の歌）

てるてる坊主 てる坊主
あした 天気に な~れ

（加西市）

子どもたちにとって、梅雨時は雨が多く、外で遊べないので退屈です。

「照る照る坊主」をつるして晴れを祈りました。

5. 高い山から (夏の歌)

高い山から 谷底見れば 瓜や茄子の花ざかり
(小野市)



「しょうらい」とは立派だという意味です。

6. どんどろきが鳴ったぞ (夏の歌)

どんどろきが なったぞ へそかくせ
(温泉町)

9. 秋が来たかよ (秋の歌)

秋が来たかよ 鹿さえ鳴くに
なぜに紅葉が 色づかぬ
(小野市)

夏の土用からの暑い日は、子どもたちは裸で家の中を走り回って遊びました。

夕立の来る前に雷が鳴り出すと、こんな歌を唄ってシャツを来ました。

10. 夕やけこやけ (秋の歌)

夕焼け こやけ あした天気にな~れ
(温泉町)

7. 盆のお月さん (秋の歌)

盆のお月さん まん丸て丸い
丸うてまん丸て角がない
(小野市)

山に陽がかり、夕焼け雲が赤く空を染めると、子どもたちは履いている草履を上に蹴り上げながら唄います。



11. 天王はんの山から (冬の歌)

天王はんの山から 日が照ってこいよ
(上郡町)

8. お月さんえらいな (秋の歌)

お月さんえらいな お日さんしょうらいで
星のようになったり 鏡のようになったり
お月若いな いっつも年をとらないで
盆のようになったり まんまるくなったり
(姫路市)

気候穏やかな赤穂郡ですが、晩秋からめっきり冷え込むようになります。子どもたちは日向ぼっこしながら唄います。

12. 子ども 風の子 (冬の歌)

(村岡町)

子ども風の子 じじばば火の子

(加古川市)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治



おお寒 こ寒 猿のどんぶく かって着ろ

(稲美町)

おお寒 こ寒 猿のじんべえ 借って着ろ

(加古川市)

おお寒 こ寒 山から小僧が とんできて

(加古川市)

おお寒 こ寒 猿のでんちを 借りて着よ

(高砂市)

13. 雪よふれふれ (冬の歌)

雪よ降れ降れ 正月ごされ

丹波のおばはん 白ぼし (帽子) 被いでおいで

(小野市)

出典 ふるさとのうた第1集
小野市観光協会編



雪よふれふれ 正月たんがござる

橙赤こなる 山からきつねがとんででる

(稲美町)

14. 雪やこんこ (冬の歌)

雪やコンコ あられやコンコ

三川の奥には 猿がキャン キャン

雪やコンコ あられやコンコ

宮の下には 猿がコン コン

(香住町)

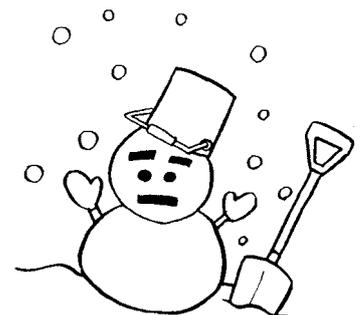
出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治



15. おお寒 こ寒

おお寒 こ寒 山から小僧が とんできた

寒いと とんできた



15. 動物、植物の歌（14曲）



兵庫県は、日本で一番低い分水嶺を境として、日本海に面する雪の多い地域と、瀬戸内に面する温暖な地域とを持ち、それゆえに多様な野生生物の生息が確認されている国内有数の県です。

前項の「季節、天候の歌」と同じように、わらべ歌の中に、動植物とのふれあいを唄った歌があるのは、日本人がいに自然とのつながりがあったかを示すものだと考えられます。

1. つくつくぼーんでーやれよ（つくし）

つくつくぼん 出やれよ
親がないか 子がないか
たった一人の 娘の子
鷹に取られて 泣ききよった

（加古川市）



全国的にも多数ある「つくし」の歌です。
上掲の「めんめらの生きた道」の中では、つくし取りに出かけて川の土手で弁当を食べた春のひと時の思い出が記されています。

つくつくぼん 出やらんか
親がないか 子がないか
たった一人の 娘の子
屋形に引かれて泣いていた

（加古川市）

つくつくぼーん 出やれよ
親がないか 子がないか
たった一人の おなごの子

おんばにはなれて 今日七日

（加古川市）

2. 味噌買うてこい（たんぼぼ）

味噌買うてこい 塩買って来い
雨が降ったら泊まってこい
日和になったら戻ってこい

（稲美町）

稲美町の梅田ふじゑさんは、この歌を、たんぼぼの綿毛を吹く時唄ったといひます。

味噌買うてこい 塩買って来い
雨が降ったら堂にとまれ

（加古川市）

3. お夏たん（穴虫）

お夏たん出ておいで 出ておいで

（加古川市）

地べたを叩いて地虫（穴虫）を釣る遊びの時に唄います。

4. 蛙 こ い（かえる）

蛙こい ちょっとこい
ととのまま たいたいま
蛙どん おいでか

しろいままに ととのさい

(加古川市)



5. ほ、ほ、ほたる来い(ほたる)

ほ ほ 蛍来い あっちの水は 苦いぞ
こっちの水は 甘いぞ
ちゃんちゃん(又はしゃくしゃく) 持って来い
くんでやろ

(小野市)

出典 ふるさとのうた第1集
小野市観光協会編



ほーほー蛍来い びん びん こい
あっちの水は 苦いぞ こっちの水は 甘いぞ
天の川丈之助 天の川丈之助
ほーほー蛍来い びん びん こい
山吹の ちょうちん とぼして とんでこい

(篠山市)

ほたる来い ぴっぴ あっちの水はにがいぞ
こっちの水は 甘いぞ
杓々持てこい 汲んだろぞ

(加古川市)

昆虫の歌の中で、全国的に多種多様な歌詞、メロディで、広く分布しているのが、おそらくほたるを題材とした歌でしょう。

以下のような歌もあります。

ほたるこい かねきつとん
ひるは おばばの 乳飲んで
晩には 提灯 高のぼり

(宝塚市)

ほ、ほ、蛍来い
あっちの水は苦いぞ こっちの水は甘いぞ
お玉嫁入り三吉仲人
うちのとつあん槍がたき
槍の先ですってんとん

(赤穂市)

ほたる来い しょうぶしょ
柳の元からころんで来い
あっちの水は苦いし こっちの水は甘いし

(豊岡市)

ほ、ほ、蛍来い やんまこい
お提灯もってこい 灯とぼそ

(神戸市)

ほ、ほ、ほたる来い
山からあだけて怪我するな 石がけつくて
手つめな こっちの水は甘いぞ
あっちの水はにがいぞ
ちゃぶしゃく持ってこい 汲んでやろ

(高砂市)

ほたるこい やん馬來い
山から落ちてても 怪我すなよ
あっちの水は辛いぞ こっちの水はあまいぞ
肥柄杓もってこい 汲んでやろ

(姫路市)

6. 雨がしょぼしょぼ降る晩に(たぬき)

雨がしょぼしょぼ 降る晩に

豆狸（まめだ）が 徳利もって 酒買いに
山焼ける ししおどる
さるが 豆食て のどキッキー

（小野市）

出典 ふるさとのうた第1集
小野市観光協会編



あめが しょぼしょぼ ふるぼんに まめだが
とっくりもつて さけかいに やまやける
ししおどる さるが まめくて のどきき

主に、四国地方に分布するといわれ近畿地方で
広く唄われている歌です。

雨のしょぼしょぼ 降る晩に
豆狸（まめだ）が 徳利もって 酒買いに
酒屋の前で ビンめんで
帰って お母やんに怒られた

（加古川市）

7. 松くいつり（松くい虫）

馬出え 牛出え牛出え

（加古川市）

松の幹を叩いて虫をとる歌です。

8. かいかいつぶれ（水鳥）

かいかいつぶれ かいつぶれ
おまえの頭に 火がついた
いっぺん 沈んで 消してこい

（加西市）

出典 ふるさとの唄
加西市教育委員会編



かいかい つぶれ かいつぶれ おまえの あたまに
ひがついた いっぺん しずんで けしてこい

池に浮かんでいる水鳥に呼びかける歌です。

かいかいつぶれ かいつぶれ
おまえの頭に 火がついたら
どんぶりせー 消えら

（稲美町）

かいかいつぶれ かいつぶれ
おどれの頭に 火がついたら
いっぺん沈んで 消やしてこい

（加古川市）

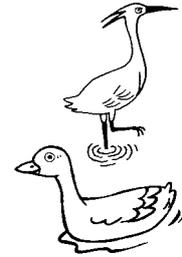
かいつ かいつ 我が家が 焼けりゃ
はよいんで 水をかけ

（小野市）

出典 ふるさとのうた第1集
小野市観光協会編



かいつ かいつ わがやが やけりゃ はよいんで みずをかけ



9. とんぼつり（とんぼ）

いお~い まぎって まぎって
そこらで べっさり てんつり まっとうへ
さが~れ さが~れ
おんや こっち こっちらこ~れ

（姫路市）

とんぼつりは、小林一茶の「とんぼつり今日は
どこまで行たことか」の俳句にもありますように、
夏の風物詩でした。長い竹のさおに糸をつけ先に
メスのとんぼをくくりつけてオスを誘います。

もうや もうや ちょめんこっちゃ向け
けんにとってホイ
こっちゃめんどこさが あっちゃおんどこさが
もうや もうや ちょめんこっちゃ向け
けんにとってホイ

（姫路市）

尻尾をもって水の中で軽くゆすりながら唄います。
弱った魚はかならず元気になったといひます。

ゆさゆさ ごんぼ 滝野の ごんぼ ...

(小野市)

出典 ふるさとのうた第1集
小野市観光協会編



10. こうもり来い(こうもり)

こうもり来い 草履やろ
草履がなけりゃ 裸足で来い

(伊丹市)

いきいきごんぼ 生きてたら放なそ
死んだら焼いて食お

(加古川市)

いきいきごんぼ ごんぼ食ってきんとせ

(温泉町)

いきいきごんぼ 死んだら煮しめ

(伊丹市)

12. あとの雁(雁)

枷(かせ)になれ 竿になれ
あとの雁 先になれ

(加古川市)

夏、夕闇が迫るころ、よくこうもりの飛ぶ姿を見かけました。こうもりはゲタを放ると地面近くまで落ちてきたといひます。

こうもり来い じょりやろぞ
雨が降ったら 下駄やろぞ

(加古川市、高砂市、小野市)

江戸時代から全国的に唄われているようですが、それは雁について唄った歌が多いということで、地域によって歌詞もメロディもまちまちなようです。

この歌の後半は、次の“あとのからす”に通じるものがあって、題材は雁ですが、歌としては“あとのからす”の変化したものとも考えられます。

11. 生き生きどんぼ(魚)

いきいき どんぼ いきどんぼ いきたら
もとのかわへ はなえちやろぞ

(千種町)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編



川や池で取った魚が弱って死にそうになると、

雁糸引いて 通れ

(伊丹市)

あとの雁 先になれ 盆に扇 買ったるぞ

(高砂市)

13. あとのからす(からす)

あとのカラス先になる 先のカラスあとになる
(温泉町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

あ の か ら す さ き に な る

さ き の か ら す あ と に な る

夕刻になると、子どもたちの遊びも終わり、家に帰りながら空を見上げると、からすが巢に帰っていくのが記憶に残っています。

他にもからすを題材に取った歌はたくさんあります。

かあかあ烏勘三郎 親ね（家）が焼けら
（加古川市）

後のからす先になれ 盆に団扇買うたるぞ
（加古川市）

からす神出の鐘たたき
とんぴ富山のたい太鼓うち
（神戸市西区）

14. 向こう猿が三匹通って（猿）

この向こう 猿が 三匹 通って
あとの 猿も もの知らず
先の猿も もの知らず
まん中の 猿が もの知りで
鯰（なまず）川にとびこんで
鯰一匹 つかんで
と～すめでくくって 線香で担って
線香が折れて 麻がらで担って
麻がらで折れて すも～とで担って
堂の隅に持っていて
ぎじょぎじよときざんで あなたに一切り
こなたに一切り もう一切たらん
だれのがたらん おまんのがたらん
おまん わりや どこへいく
油買いに 酢買いに 油屋の庭（かど）から
牛糞（うしごそ）で すべて 酢一升こぼし
油一升こぼし
油屋の赤い目が ちょっと出て ひろって
あのやつ憎い このやつ憎い 太鼓に張って
あっちから どんどん こっちから どんどん
太鼓がやぶれて 火くべて あの火 見やれ

燠（おき）なった おの燠 見やれ
灰なった あの灰 見やれ
ゆーべの父（てて）風 けさの母（はは）風
みなふきとった

（村岡町）

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

こ の む こ さ る が さ ん び き と おー っ て あ と の さ る も

も の し ら ず さ き の さ る も も の し ら ず ま ん な か の さ る が

も の し り で な ま ず が わ に と び こ ん で な ま ず い い っ び き

つ か ン で と す め で く く っ て せ ー ん こ で

に ら っ て せ ー ん こ う が お れ て お が ら で

に ら っ て お が ら で お れ て す も と で

に ら っ て ど の す み に も っ て い て ぎ じ ょ ぎ じ よ と

き ざ ん で あ な た に ひ と き り こ な た に

ひ と き に も う ひ と き り た ら ん だ れ の が

た ら ん お ま ん の が た ら ん お ま ん わ り や

ど こ へ く あ ぶ ら か い に す か い に あ ぶ ら や の

か ど か ら う し ご そ で す べ っ て さ ー い っ し ょ う

こ ぼ し あ ぶ ら い っ し ょ う こ ぼ し あ ぶ ら や の

あ か い め が ち ょ っ と で て ひ ろ っ て あ の や つ

に く い こ の や つ に く い た い こ て

ほ っ て あ ち か ら ど ん ど ん こ ち か ら ど ん ど ん た い こ が

や ぶ れ て ひ ー く べ て あ の ひ ー み や

れ お き な っ た あ の お き み や れ

は い な っ た あ の は い い や れ ゆ ー

べ の て て か ぜ け さ の は は か ぜ み な ふ き と っ た

もとは、「花折に」という題名の子どもたちが
手をつないで右や左へとぞろぞろ歩く遊びに唄わ
れていた歌ではなかったかと考える人もいますよ
うです。

「猿が…」の歌は、全国各地で「手まり歌」や
「子守歌」として唄われているといわれています。

昔昔の大昔 猿が三匹居ったげな
前の猿はもの知らず 後の猿ももの知らず
中の猿が中もの知り
ものしり川へ飛び込んで
鯰一匹押さえた 手であげるのは可哀し
足で揚げるのも可哀し
燈芯で縛って 線香で担うて
芋殻の立杖 お堂の前まで運んで
摺子木で刻んで あなたに一切れ
こなたに一切れ お万にやるのがうなつた
お万どこへ行った 油買いに
油屋のかどで 油一升こぼいて
しも屋の犬と かみ屋の犬が
ぺろぺろと舐めた
その犬どがいした その犬殺いた
その皮どがいした その皮太鼓にした
その太鼓どがいした その太鼓焼いた
その灰どがいした その灰豆にかけた
その豆どがいした その豆鳩が食うた
その鳩どがいした
その鳩向こうの山へ
パタパッタと逃げてしもうた

(千種町)

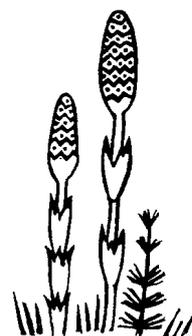
さるが三匹 おったげな
さあきのさるは もの知らず
ああとさるも もの知らず
まんなかのさるが ものしりで
なあまずがわに 飛び込んで
なあまずいっぴき おおさえた
「どうして食おう」
「おまんがとこで
庖丁かって 切って 食おう」
「どないして いこか」
「にのうで(かついで) いこう」いうて
にのうていって
おまんにやらぬ間に 食うてしもて

おまんが おこつた

(宍粟郡)

裏の山から 猿が三匹 とんできて
前の猿ももの言わず 後の猿ももの言わず
なかのなかの子猿が ようもの知つとて
なまず 川へ飛び込んで
なまず一匹ぺっさいて
手で取るのもかわいいし
足で取るのもかわいいし
あんまり かわいさに
とうしみ屋へ寄って とうしみ一本もろて
おがら屋へ寄って おがら一本もろて
線香屋へ寄って 線香一本もろて
とうしみで くくって おがらで いのて
せんこを杖に めき しゃき しゃきと
堂のすまへ もてて ちょきちょき きざんで
あんたも ひときれ 私もひときれ
後にひときれ残つた
太郎べえさんの犬と 次郎べえさんの犬と
とりあいやつて
一匹は死ぬし 一匹は逃げるし
その死んだ皮 どないした
太鼓にはつて どんどんどん
三味線にはつて ピンピンピン

(加古川市)



16. 年中行事の歌 (15曲)



近年まで、普段の暮らしの中で、子どもの仕事はたくさんありました。

水汲みをしたり、風呂焚きをしたり。また、年中行事でも大切な子どもの役割がありました。

しかし今、人々の暮らしの変化にともなって、暮らしの中での子どもの仕事もなくなっていきました。

年中行事もその三分の二が失われ、一部行われている行事も昔のように村総出で楽しむことが少なくなっているといわれています。当然、年中行事のことを唄ったわらべ歌も姿を消しつつあります。

今回は年中行事の中でも、特に子どもの行事を中心に情報が集まりました。

自然の恵みへの祈り言葉、災厄へのまじない言葉。そんな言葉が行事の中で「囃し」になり、次第に旋律を伴うようになったとも考えられます。

1. 正月三日

正月三日 盆二日 祭り一日
せがないせがない

(加西市)



年中行事の中で、だれもが待ち遠しく思うのが正月でしょう。旧暦では、立春を目安として新年を迎えていましたが、現在では、太陽暦を採用し、1月1日を区切りとして新年が始まります。

もともと正月は、年の神様を迎え、豊作を祈願する行事で、いろいろな飾りや供え物が用意されます。また、年の神様は、正月様や歳得神など地域によって様々な呼称があります。

この歌は、かつて農家の1年に、休みが全部で6日しかなかったことを唄っています。地域によっては、盆のところを三日と唄ったり、四日と

唄ったりします。

正月三日 盆四日 祭り一日 ことひなか
(温泉町)

正月三日 盆三日 祭り一日
こと半日(ひなか)

(香住町)

しよんがつ三日 盆三日 祭り一日
せがないせがない

(加古川市)



2. 正月いうたら

正月ゆうたらええもんや
赤いべべ着て 羽ついて
雪より白いままたべて
割り木のような魚(とと)そえて

おかあちゃん でで(銭)おくれ
さあさあ きんちゃくに 入れてやる

(加古川市)

正月ゆうたらええもんじゃ
赤いべべ着て がか履いて
雪より白いままたべて
割り木みたいなのとそえて
「おかん銭おくれ」
「さあさあ きんちゃく 入れてやる」

(加古川市)

正月いうたらええもんや
雪より白いままたべて
割り木みたいなのとそえて
おかんキンチャへ銭いれて……

(稲美町)

正月いうたらええもんや
雪より白いもち食べて
割り木のようなとそえて

(神戸市)

正月はよいもんだ
ゆきのような ままかって
紅のようなととくって 油のような 酒飲んで
正月はよいもんだ

(加西市)

出典 ふるさとの唄
加西市教育委員会編

しょう が つは よいもんだ ゆきのような ままかって
べ にのよな ととくって あぶらのよな
さけのんで しょう が つは よいもんだ

3. うちの裏の赤猫が

うちの裏の赤猫が
じょいじょい(さかいき=月代)剃って
髪結うて お歯黒つけて 紅さして

(加古川市)

今回、加古川市より正月行事の歌として情報をお寄せくださいましたが、長谷坂先生が赤穂市で収集された手まり歌に、“うちの裏の黒猫がおしろいつけて紅つけて人に見られてちょいとかくす”という歌があります。また、同じく大屋町の手まり歌に“うちの裏の三毛猫は散髪して風呂いってお化粧して紅ぬって人に見られてちょいとかくす”という歌もあります。

4. 福とんぶり

福とんぶり 徳とんぶり

(養父町)

元旦の朝に一家の主人や年男が、井戸から汲む水(若水)でお茶を沸かして飲む行事があります。このお茶を福茶といって飲むと若返るといふ言い伝えがあります。若水を汲む時、豆がらを焚いてこの歌を唄います。

もっともこの行事は、地域によって若水の使い方や違いがあり、西宮市では顔を洗う、姫路市では口をすすぐ、福崎町は雑煮に使うなどがあります。

ふくとう

(大屋町)

年徳さん、福おくれ

(美方町)

若とんぶり

(浜坂町)

とんぶりや とんぶりや 若とんぶりや

(関宮町)

5. えんよーさんよー

えんよー さんよー おおさんよー
(美 方 町)

但馬では、正月4日に「おとう」というおこもり行事があります。

村中の家々から1本ずつ集めた割り木をもやして炭火をならしておき、ふんどし一つになって水ごりをとった子どもたちが、数人の大人に支えられて赤々とした炭火の上を裸足で渡る行事です。

6. 七草なずな

七草なずな 唐土の鳥が
日本の国に 渡らん先に
七草なずな ホーホーホー
(香 住 町)

1月7日の朝、邪気払いのために七草粥を食べます。ビタミンの補給のための古人の知恵でしょう。七草とは「せり、なずな、おぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」の7種ですが、但馬や西播磨山間部などの雪の多い地方では、7種全て揃うことがないので、このうちの1種か2種を入れます。また、餅を入れて雑煮にする地方や、餅を入れない地方もあります。

6日の夜、七草を刻みながら、呪文を唱える地方がありますが、その呪文は地域によって異なります。

なんなん七草 唐土の鳥が 日本の土地へ
渡らぬ先に コトコト コトコト
(神 戸 市)

トウノトリが 日本の土地に 渡らん内に
ナニワ七草 テツテクセ テツテクセ
(西 宮 市)

七草なずな 唐土の鳥が
日本の国に 渡らぬさきに
コトコトや コトコトや
(姫 路 市)

唐土の鳥が 日本の土地へ 渡らぬ先に
七草なずな なずなや
ことこと ことこと ことこと
(加古川市)

唐土の鳥が 日本の国に 渡らぬさきに
なずなやコトコト なずなやコトコト
(東 条 町)

唐土の鳥は 日本のうちに 渡らん先に
七草そろえて ホーホーホー
(温 泉 町)

唐土の鳥が 日本の国に 渡らぬさきに
七草そえてホーイ ホーイ
(美 方 町)

七草なずな 七日の晩に
唐土の鳥が 日本の国に 渡らぬさきに
七草なずなを 手につみいれて
(宍粟郡一宮町)

7. 狐 狩 り

狐狩りそうろ ありやなにそうろ
橋の下かがんた まんだ尾が見える
はよ行って 追(ぼ)い出せ
(朝 来 町)

1月14日の夜、火をつけた松明をかざして、呪文を唱えながら町内をまわる、農作物を荒らすキツネを追い払う行事です。全国各地にある鳥追いなどと同じ意味をもった行事です。地域によっては、きつねがえりと言ったり、練り歩きの呪文も異なります。子どもはかき餅などをいただきます。

また、姫路市からお寄せいただいた“おろろ”という唱え言葉は、一説によると動物や鳥の霊を呼び寄せる力があると信じられていたと考えられています。

きつねがえりホーイホーイ
(中 町)

ケツネガエリ オロロ
(姫 路 市)

ありゃなにそうろう
きつねがりそうろうかりかりもうそう
かりもうそう ドーン
(宍粟郡一宮町)

きつねギャーリヨ どんより
えんそら ことしね どんで
六月のよをどんより えんそら
ことしね どんで
(美 方 町)

若宮どんと おまつりとてきつねがえりに候
わりゃよんべ何食うた つつほ団子3つくだ
(氷 上 町)

キツネ狩り どんどん まっで行け
子どもえら ほか見ちゃ わるいど
(香 住 町)

はん谷のキツネも くらん谷のキツネも
矢田の庄屋に 狩りこんだ 狩りこんだ
(香 住 町)



8. と ん ど 左義長

とんど ほっからかすぞ
いまのとんどは ほんまやぞ
(芦 屋 市)

ドンド、トンド、サイトヤキ、ホジョジなどとも言います。正月に飾った注連縄や門松などを集めて焼く子どもたちの行事です。

「書き初めをトンドの火で焼くと字が上達する」「トンドの火で焼いたみかんを食べると、風邪を引かない」「木の燃えかすを体のけがをしているところに当てると、けががなおる」「灰を家の周りにまくと厄除けになる」などの言い伝えが各地にあります。

また、とんど(左義長)の火で正月の鏡餅をあぶって小豆粥などに入れて食べるのは、兵庫県全域で行われています。

ローソク巻いた 芯巻いた……
(加古川市)

とんどや ほっけらかっせ 皆こいよ
(太 子 町)

ろうそく巻いた 芯巻いた
ろうそく巻いた 芯巻いた
とんどや 餅やけ とんどや 餅やけ
(稲 美 町)

9. 成 木 責 め

なるかならんかこらどうじゃ
ならんと 鉄(はさみ)でちょんぎるぞ
(加古川市)

1月14日または15日の朝に、大人と子どもが、柿、栗、梨、梅などの実のなる木をたたいて呪文を唱え、実りを祈念する行事です。

姫路市では、大人が「なるか、ならぬか、ならぬと切ってやる」と唱え、子どもが「なります、なります、きつとなります」と応えます。その後、小豆粥を木の根元などにかけてやり、たくさん実が成るように祈ります。

10. 豆まき

(主人) 「福は内、鬼は外」

(家族) 「あっちの隅から 湧く湧く
こっちの隅から わーくわく」

(加古川市)

2月3日の節分は、立春の前日のことで、季節の変わり目を表します。もともと立夏、立秋、立冬の各前日を含めて節分と言いましたが、現在では立春の前日だけをさして言うようになりました。

昔は2月4日の立春を新年の目安としていましたので、節分には年越しの行事や、悪霊払いの行事が行われ、現在でも盛んに行われています。

豆は本来「魔滅」と書き、神秘的な力で魔物を追い払うものであるといわれています。宮中では12月の大晦日に古くから行われていました。豆を年の数だけ数えて食べ、体内にも魔物を追い払う力を取り入れます。魔物は匂いや音や光が嫌いで、豆を炒る時のパチパチという音や、匂いも魔物に効力を発揮するといわれています。

11. 虫送り

実盛さんのお通りじゃ
よろずの虫よ お伴せい

(加西市)



豊作を願う行事「虫送り」には、たいてい「実盛さん」が登場します。源平時代、平家の武将斎藤別当実盛は、田んぼに足をふみ入れて敵に討たれ、その草履から稲の害虫がわいたという説話があります。

生野町では、夏の土用の亥の日、村中でわら人形の実盛さんを作り、鉦や太鼓をたたいて村中をまわり、村の下手に立てておき、夜になると火をつけて虫よけとしました。

送った送った 尺とり虫送った
実盛さんが ごしょらく
丹波のかたへ 行け行け
送った送った 稲の虫送った
実盛さんが ごしょらく
よろずの虫も ついて来い

(生野町)

ぶうぶう かんかん 稲の虫も
綿の虫も いんでんか(いんじゃれよ)

(加古川市)

12. 七夕さん

たなばたさん ほおずきとつても かまへんか
こどものことなら だんない だんない

(加西市)



7月7日の七夕は、五節句のうちの一つです。中国から伝わってきた伝説「牽牛・織女(けんぎゅう・おりひめ)」にまつわる行事で、平安時代には中国の乞巧奠(きっこうでん)の星祭りを行っていましたが、現在では、早朝に里芋の葉に溜まる朝露を集めて、その水で墨をすり、短冊に願いを書き笹につるして飾り、星に願いをかけます。しかし、日本における七夕本来の意味は、盆行事の前のはらいでした。

七夕さん ほおずきとつても だんないか
おまえのこっちゃん かまへんかまへん

(姫路市)

13. 地藏盆

石の地藏さん 頭が丸い
チリップ チャラップ
アップク チキリキ アップパ
リュウセ リュウセ

アップク チキリキシャ～

(加古川市)

14. 祭り

東の空がしらんだ

じいじや ばあばは 早起きて

おこわをむっしゃり くっしゃりな

(城崎町)

祭りは、地域のそれぞれの神様にその地域全体で感謝する行事で、各地で一年を通じて行われます。その中で秋祭りは、田畑の神様に豊作を感謝し、収穫した農作物を田畑の神と一緒に、村全体で祝うものです。

10月を神無月というのは、藤原清輔の「奥義抄」にでてくる「10月は日本中の神様が出雲大社に集まって各地にはいなくなるから…」という説があります。

地域によっては、子どもの奉納相撲が盛んです。

いまからすもんがはじまりまっせーどんどん

(太子町)

15. 亥の子餅

亥の子(いのこ) 亥の子 ゆうといて

蕎麦の い餅(そばのかいもち) なんだいや

(加西市)

出典 ふるさとの唄
加西市教育委員会編

旧暦10月(11月)の亥の日に、1年田んぼを守ってくださった田の神様に感謝する行事です。春に祈念の行事をする地方がありますが、ほとんどは秋だけに行っています。亥の子は、子どもたちが「亥の子の晩に、祝わぬものは、鬼産め、蛇産め、角の生えた子産め」など囃し歌を唄い、悪霊をはらいのけるため、藁束で地面をたたき、餅やお金をもらいながら練り歩く行事と、家の中で

亥の子餅などを供える行事とがあります。

いんのご餅 くれんか 呉れんやのかかは
鬼うめ蛇うめ つのの生えた子産め

(加古川市)

いんのご餅搗(つ)からんか
ついてやな～けりゃ

搗いたろけ もんでやな～けら 揉んだろけ

(加古川市)

いの子 いの子 いうといて
餅くれん かかは

禪(ふんどし)かいて寝とれ

(加古川市)

おっさん おばはん いの子の 餅くれんか

(加古川市)

十夜の晩に 重箱ひろうて あけてみたらば
ほこほこ まんじゅう 握ってみたらば

重兵衛さんのきんだま

(加古川市)

いのこいのここと 言うといて
蕎麦のかい餅なんじゃいな

餅くれぬかかあは 追い出せ蹴出せ

ええかかあ貰うてもちもらおう

(加西市)

イ～ノコ イ～ノコ イウトイテ
ソバノカイモチ ナンジャイナ

モチクレンカカハ オニウメ ジャウメ

ツノハエタ コウメ

(小野市)

亥の子もっちゃ～ 一つや二つでたりません

おひつに一杯 祝いましょう

おっさんレイギ おばさんスリバチ

今夜のみそすり 祝いましょう

(川西市)

いのこ いのこ おいせいのこ
いのこ餅やつかんか おじや ばば よばんか

今年豊作 穂に穂が咲いて

道の小草に米がなる

祝うておくれ 祝うてくれんにゃ

鬼の子もうけ 蛇もうけ

(ここでなにか祝儀がもらえると)

ここの屋敷はめでたい屋敷

だんな大黒 おしんど恵比寿

栄えましょ 栄えましょ
(なにももらえないと)
ひげの生えた子もうけ
(東 浦 町)

いのこ いのこ おいせのいのこ
いのこはんというひとは
1で俵ふんまえて 2でにっこり笑うて
3で盃いただいて 4でよんなかええように
6つ無病息災に 7つ何事ないように
8つ屋敷開いて 9つ米倉立ち上げて
10でとうとうおさまった
(津名郡一宮町)

亥の子 亥の子 亥の子の晩に 重箱引いて
開けてみればホコホコまんじゅう
握って見れば十べえさんの金玉
(西宮市、伊丹市)

いんのこぎんとせ よ~いぎんとせ
いんのこぎんとせ よ~いぎんとせ
(家の前で練る時)
今年のいんのこは おめでたい いんのこで
花をしっかりとあげとくれ
どんでんちょやまか ちょうえ ちょうえ
葉もしゅえの おもしろや
なんじゃいのオ ひょうたんや
エツ エット
(姫 路 市)

いんのこ いんのこ いうといて
そばのかいもちそりゃなんじゃい
おばはん それでもいんのこか
(姫 路 市)

今年のいんのこは おめでたのいんのこで
小豆3升 米3升 合わせて6升つきまぜて
つきてが無けりゃ ついたろか
もんでが無けりゃ もんだろか
食う手が無けりゃ 食うたろか
やーしょえ こじきよ
西のらんごに腰かけて 東のらんごに腰かけて
月を眺めて歌よんで
ヨ~イ コリヤ チョ~サ チョ~サ
(家 島 町)

いんのこ くれんこ
くれん家のかかあは 鬼産め 蛇産め
(香 寺 町)

今夜は亥の子(ドン) 亥の子の餅
ついたんしょ(ドン)
つき手がなけりゃ ついたんしょ(ドン)
しょしょ正直じいさん へけたった(ドン)
たたたぬきの金玉 八ちょ敷き(ドン)
きつねのじじいも団子にしょ(ドン)
(上 郡 町)

いのこや いのこや
いのこのよさにいわんもんは
おじゃめにこじゃめ つのがはえたじゃんめ
こんのみそくさらんように
いのこのかみさんいわいましょ
それもういっちょう
(三日月町)

やったり とったり いのこもち
(美 方 町)

いのこ いのこ おいせのいのこ
今年や豊作 ほにほがさいて
(温 泉 町)

いのこもち 祝いましょ
(篠 山 市)

亥の子のもち祝いましょう
今年の豊作おめでとう
千石俵で祝いましょう
はんじょう はんじょう ドはんじょう
(篠 山 市)

17. 囃し歌、数え歌、言葉遊びの歌 (50曲)



子どもたちの普段のくらしや遊びの中で、友達をからかったり、数を数える時に拍子や旋律がついたものがたくさんあります。

今回送ってきていただいたものはできるだけ掲載することを心がけました。

1. や~いや~い(からかい歌)

や~い や~い でっかんしょ

(和田山町)



簡単なものには“や~い、や~い”と友達をやし立てるものから、長い歌になっているものまで様々です。

2. 知らんど(からかい歌)

知~らんど 知~らんど 先生にいったろ

(和田山町)



ゆ~たんねん こ~たんねん
先生にゆ~たんねん

(神戸市)

3. さきさきいくもん(からかい歌)

さきさき行くもん ど~ろぼ
後からくるもん け~さつ
さきさき行くもん せんせい

後からくるもん せいと

(神戸市)

いっぴきとっぴきしらみのこ
とって逃げるは どろぼの子
あとからおいかけ 巡査の子

(八鹿町)



4. うそ泣きするもん(からかい歌)

うそ泣きするもん 役者の子
役者に抱かれて 乳飲んで
ああおかし ああおかし

(香住町)



5. 「い」はいがつく (からかい歌)

「い」はいがつく いんやのいんすけ
いって いられて いりころされた
「ろ」はろがつく ろんやのろんすけ
ろって ろらげて ろっちんげーる
(千種町)

こうちゃん こがつく こり屋のこんこ
こんで こられて こりころされた
(吉川町)



あのがきやどこの子 丹波の やじの子
やじの銭盗んで 鯛買うて 食るて
のどへ骨立てて ぎゃーぎゃー ぬきゃーた
(養父町)

8. おけや (からかい歌)

おけやはんことこと ままくて三升
またひつのぞく
(小野市)

6. お巡礼さんよ (からかい歌)

お巡礼さんよ 豆米おくれ
豆米なけりゃ 銭金おくれ 銭金なけりゃ
お巡礼さんの道に こけらが生えて
生えたも道理 生えんも道理
(南淡町)

9. 嫁にやっても (からかい歌)

嫁にやっても 福沢にやるな
藪蚊にさされて 死のとした
藪蚊にかまれて 死ぬよなとこに
二度と目かけて 来てくれな
嫁入りさしても 石守へやるな
ひえのかいもち 身が痩せる
嫁入りさしても 手末へやるな
小褌からげて さかのぼる
嫁入りさしても 西条へやるな
つるべからげて さかのぼる
(加古川市)

7. あの子どこの子 (からかい歌)

あの子どこの子 丹波の甥の子
甥の銭盗んで 鯛買うて食うて
のどに骨立てて 納戸の隅で
しゃっくり しゃっくり ないたげな
きっくり しゃっくり いうたげな
(小野市)

10. 大阪鎮台 (からかい歌)

大阪鎮台 あかちんだい
また負けたか 八連隊
それでは 勲章くれんたい
(加古川市)

11. 人力ひき (からかい歌)

人力ひき 車力ひき 十五銭
ここから明石まで 二十五銭

(加古川市)

12. 性の悪いのは (からかい歌)

しょうの悪いのは 男のガキじゃ
口で言うこと 手で返す

(加古川市)

13. 真似し (からかい歌)

真似し しいしい あくちが切れる
切れた あくちは治らんぞ

(加古川市)

14. どこや知らんの (からかい歌)

どこや知らんの だれしゃんは
尾のない狐 わしも二三べん だまされた

(加古川市)

15. お多福 (からかい歌)

お多福みふく 風吹いたら 四吹く

(加古川市)

16. かたきん (からかい歌)

かたきん きんだま 落とすなよ
わしが拾たらやるけれど
とんびが拾たらくれへんぞ

(小野市)

出典 ふるさとのうた第1集
小野市観光協会編



17. アホのほうすけ (からかい歌)

アホの ほうすけ 山の芋
田んぼに植えたら でけなんだ
山に植えたら ようでけた

(播磨町)

18. きんかんさん (からかい歌)

きんかんさん どこ行く 便所行く
はまるな はまった それみなさい
おかみさんのいうこときかんから
かっぱのねえさん子ができて
おうても抱いてもよう泣く児
こんどできたら踏み殺す

(出石郡)

19. 寝小便 (からかい歌)

今は夜中の3時ごろ
どこやのおっさんねとぼけて
あっというまに寝小便
下で寝ていたおっさんが 雨だ雨だと大騒ぎ
バケツと盥(たらい)を持ってきて
それでも足りない寝小便

(津名郡一宮町)

20. あほかいな (からかい歌)

A: あるおっさんいいはった
B: なんや
A: 南極へ行った時
B: ふんふん
A: 南やから暑い思て 海パンもてたら笑われ
た
B: あほかいな

(神戸市)

21. 朝の4時ごろ (からかい歌)

朝の4時ごろ 弁当箱下げて
家を出て行く おじんの姿
服はぼろぼろ 地下足袋はいて

帽子はそこぬけ 頭は100ワット

(神戸市)

十でとうとうはげちゃびん

(大屋町)

22. みかんきんかん (からかい歌)

みかん きんかん 酒のかん
親のいうこと 子がきかん
親父の折檻 嬉しかん
相撲取り裸で風邪ひかん
橋の欄干 屋根葺かん 犬は糞して 尻ふかん
(千種町)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編

Musical notation for 'みかんきんかん' with lyrics: みかんきんかん さけのかん おやのゆうこと こがきかん
おやじのせっかん かかきかん すもーとりはだかで かぜひかん
はしのらんかん やねふかん いぬはくそして しりふかん

みかん きんかん 酒のかん
親父の折檻 子がきかん
相撲取りや 裸で風邪ひかん
田舎の娘は 気がきかん
(香住町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

Musical notation for 'みかんきんかん' with lyrics: みか ん きんか ん さ けの か ん
お や じ の せ っ か ん こ が き か ん

23. ひとつ光った (からかい歌)

一つ光ったパゲがある
二つ舟形パゲがある
三つ三日月パゲがある
四つ横にもパゲがある
五ついがんだパゲがある
六つ向こうにパゲがある
七つ並んだパゲがある
八つやっぱりパゲがある
九つここにもパゲがある

Musical notation for '十でとうとうはげちゃびん' with lyrics: ひとつ ひかつた ばげがある ふたつ あながた ばげがある
みつ みかづき ばげがある よっつ よこにも ばげがある
いつつ いがんだ ばげがある むっつ むこーに ばげがある
ななつ ならんだ ばげがある やっつ やっぱり ばげがある
このつ ここにも ばげがある とーで とーとー はげちゃびん

一つ左にハゲがある
二つ振ってもハゲがある
三つ右にもハゲがある
四つ横にもハゲがある
五ついつものハゲがある
六つ昔のハゲがある
七つ斜めにハゲがある
八つやっぱりハゲがある
九つここにもハゲがある
十でとうとうはげちゃびん
(神戸市)

24. あほばか (からかい歌)

あほ ばか まぬけ
あまえのかーちゃん でべそ
あまえもよくにた でべそ
電車にひかれて ペっちゃんこ
空気を入れたら 百貫でぶ

(温泉町)

25. 鬼の来ん間に (からかい歌)

鬼の来ん間に 豆一升 ぼーりぼり
(香住町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

Musical notation for '鬼の来ん間に' with lyrics: お に の ご ん ま に ま め ー い つ し ょ ぼ ー り ぼ り

26. 泣きびすこぼす (からかい歌)

泣きびす こぼす 堂の下にいけいけ

(温泉町)



27. 太郎や次郎や (からかい歌)

太郎や 次郎や わりや どけー
馬つーにやーだー
段々畑の 柿の木に つーにやーだー
藁かまして つーにやーだー
藁の中見たら 赤きやー 小袖を みーつみつ
白い小袖を みーつみつ
みーつになったら わくぞ
十三、七つ 七織り 着せて
京の町 出やーたれば
はな紙 落とし 香箱 落とし
こー屋の おせんが ちょっと 出て ひろて
泣いてもくれず 笑ってもくれず
えわえわ くれな おらいとの もーけた

(但馬地方)

28. ちゃんがいはあさん (からかい歌)

うちのお菊さん 何故飯食べぬ
腹が痛いか 夏負けしたか
腹も痛うない 夏負けもせずじゃ
腹にこの月三つ児ができて
産もか 殺そか 若い衆に問えば
わしの児じゃないどうなとさんせ
ちゃんがいな ちゃんがいな
ちゃんがいはあさん 今年九十九で
熊野へ嫁入りしよと云うてじゃ
白髪みすべに たけながかけて
山を通れば 山師が笑う
山師笑うならがんじき買うてあげる
それがいやならどうなとさんせ
村を通れば守り子が笑う
守り子笑うなら歌唄うてきかそ
それがいやならどうなとさんせ

(高砂市)

しょうがいな しょうがいな
しょうがいのばあさん
九十九で熊野へ嫁入りしよう云うてじゃ
白髪三筋に たけながかけて
奥歯二本に べにかねつけて
これでよいよい 嫁入りしようたらくじゃ
山を通れば 芝かきが笑う

川を通れば 洗濯しが笑う
 町を通れば 守り子が笑う
 守り子笑うな あめこうてやるぞ
 あめはにちゃにちゃ
 守り子はきらい しょうがいな しょうがいな
 (加古川市)



29. ゆびきり(約束)

ゆびきりげんまん うそついたら
 針千本 のます 指切った
 (県下各地)

30. 明日天气に(天気占い)

明日は天气か 雨降りか
 くものはあさんに と~てみ~
 (香住町)



あ~した 天气に な~れ
 (県下各地)

31. いもむし(となえ歌)

いもむし ご~ろごろ
 ひょ~たん ぽっくりこ
 (温泉町)



32. 馬か牛かひこーきか(となえ歌)

馬か 牛か ひこ~きか
 (温泉町)

33. しびれ京へ(呪い歌)

しびれ京へ上がれ 京でもちつけ
 いなかで だんごつけ
 (加古川市)

足がしびれたときにうたうまじないの歌です。

34. どれにしようかな(占い歌)

どれにしようかな うらのゴンベエさんに
 きいたらよくわかります
 プツとこいて プツとこいて プップップ
 (姫路市)

どれにしようかな うらの神様に
 きいたらよくわかります かきのたね
 (姫路市)

どれにしようかな やまぶしのほらのかい
 (太子町)

35. いまのへはだれがこいた(占い歌)

いまの屁は だれが こいた
 いろりの 隅の よたろうが こいた こいた
 ぼーに ぶーんと むけ
 (香住町)



36. ぼんさんが (数よみ歌)

ぼんさんが 尻をこいた
ぼんさんが 尻をこいた
プリプリプリプリ

(加古川市)

37. 姫路から (数よみ歌)

姫路から明石まで いてきたら 夜があけた

(加古川市)

38. やまぶしの (数よみ歌)

やまぶしの ほらのかい
やまぶしの ほらのかい

(加古川市)

39. ちゅうちゅう (数よみ歌)

ちゅうちゅうたこかいな

(加古川市)

べろべろ勘定 べろ勘定
尻こいた方に ちょっと向け

(温泉町)

40. 八百屋づくし (数え歌)

まずは、八百屋づくしで参りましょう
(八百屋づくしでご当家をおほめ申しま
しょう)

一にイチョウの実 二ににんじん
三にさんしょうや 四にしいたけ 五にごんぼ
六つむかでいも 七つなすび 八つ山芋
九つこいも 十で とんがらしがききすぎて
あ、から から から から 八八八八八
泣くより笑うほうが、おめでとうございますな

(緑 町)

41. 市場へ出るのを (数え歌)

市場へ出るのを一という

荷なうて売るもの二という
子供を生むのを三という
子供の小便四四という
白黒ならべて勝負するのを五という
ぜんざい屋の あんどんを 六という
貧乏人のやりくり 七という
お着いれるは 八という
心配するのを 九という
おこわを入れるのを十という
土俵入りにはドスコイ ドスコイ

(加古川市)

42. 一でいっちゃん (数え歌)

一で いっちゃん芋とって 二で 逃げて
三で さがして 四で 知れて
五で ごんぼでどつかれて
六で牢屋へいれられて
七で 火あぶりあはされて 八で はられて
九で 首くくられて
十で とうとうしんでもた

(随泉寺に埋められた)

(加古川市)

43. さよなら三角 (しりとり歌)

さよなら三角 また来て四角
四角は豆腐 豆腐は白い 白いはうさぎ
うさぎははねる はねるはかえる
かえるは青い 青いは病気
病気はうつる うつるはかがみ かがみは光る
光るはおやじのはげあたま

(大屋町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

さいなら三角 また来て四角
四角は豆腐 豆腐は白い 白いはうさぎ
うさぎははねる はねるはかえる
かえるは青い 青いはお山
お山は高い 高いはお空 お空は光る
光はおじいのはげあたま

(篠山市)

44. ダイヤモンド(しりとり歌)

ダイヤモンドこうてんか ダイヤモンドは高い
高いは二階 二階はこわい こわいは幽霊
幽霊は青い 青いは坊主 坊主はすべる
すべるは氷 氷は白い 白いはうさぎ
うさぎははしる はしるは電車
電車はうなる うなるは病気 病気はうつる
うつるは鏡 鏡はわれる われら日本万歳

(神戸市)

45. 紺屋のネズミが(となえ歌)

紺屋のネズミが藍(あい)食て のり食て

隅んらヘクチュクチュ

(加古川市)

46. にごり澄め澄め(となえ歌)

にごり澄め澄め 丹波のおじが
水くみに 来るよ

(千種町)

47. 大きな夢(となえ歌)

夕べみた夢 大きな夢
(テイエン)(チンエン)(船)
下駄にはき
そのまた帆柱(ほばしら)杖につき
四百四州をひとまたぎ
あまりのどが渴いたので
(こんろん山)尻うちかけて
黄海の水 飲み干せば
何やらのどに引っかかったので
つば 吐き出して 良く見たら
万里の長城が 飛んで出た

(千種町)

48. 一歳二歳の(となえ歌)

一歳二歳の ばあさんが
八五六の 孫つれて
太平洋の 山登り
水のない川 ジャブジャブと
みみずの骨で 足ついた
それを見ていた めくらさん
つんぼの医者に 言いました
つんぼの医者 of 言うことにや
山でとった はまぐりと
海でとった まつたけを
水で焼いて 火でねって
あした食べたら きょう治る

(神戸市)

49. ようしよし(となえ歌)

八頭 吉川 板負いが
キタコラ 岸野の橋から バッサリあだけて
岸野の若い衆にご苦労をかけ
晩には 五升樽 ヨーシ ヨシ
(千種町)

50. 梅干の歌

三月四月花ざかり うぐいす鳴いた春の日も
楽しい時は夢のうち
五月六月実がなれば 枝からふるいおとされて
近所の町へ売り出され 何升何合のはかり売り
もとよりすっぱいこのからだ
塩に漬かってからくなり
しそに染まって紅くなり
七月八月あつい頃 三日三晩の土用干し
思えばつらいことばかり
これも世のため人のため
しわはよっても若い気で
小さい君らのなかま入り
運動会にもついて行く
まして病・戦のその時は



子守歌

11. あやし歌(11曲)



一口に子守歌といっても様々ですが、大きく分けて、幼児をあやす「あやし歌」、幼児を眠らす「ねさせ歌」、そして、子守り奉公の辛さを歌った「守り子の歌」に分けられます。

幼児を楽しく遊ばせることをねらいとした「あやし歌」は、前述した遊び歌の項の手遊び歌や指遊び歌などに近い感覚の歌です。

1. お月さんなんぼ

お月さん、年なんぼ
十三、七つ まだ年若いな
わこうもごんせん 二十でごんす
はたやの かどで 銭三文 ひろて
一文で あめこうて 二文で招待しよ
(加西市)

出典 ふるさとの唄
加西市教育委員会編

おつきさん としなんぼ じゅうさん ななつ
まだとしや わかいな わこうも ごんせん
はたちで ごんす はたやの かどで ぜにさんもんひろて
いちもんで あめこうて にもんで しょうたいしよ

古くから様々な文献に記されている「あやし歌」に「お月さん幾つ」があります。その発生や起源はわからないそうですが、もともと中秋の名月を唄った歌が、その叙事的なところが好まれて、子守唄やあやし歌、手まり歌などに転用されていったと考えられています。

今回寄せられたものも「あやし歌」としての記載が多かったのでこの項にあげました。

兵庫県では、瀬戸内に面した地域でよく歌われているようです。歌詞もまちまちですが、意味はよく分からないものが多いです。

お月さん、年なんぼ
十三、七つ まだ年若いな
若けりや子うめ 子生んで どないしよ
おんばにだかせ
おんば どこへいた 油買いに 酢買いに
油屋の門で 酢一升こぼして
酢屋の門で 油一升こぼして
たるべの犬と じろべの犬が
けとけと ねぶった
(加西市)

お月さん、歳なんぼ
十三、七つ 歳まだ若いな
若屋のかどで 銭三文拾うて
一文で飴買ひ 二文でよばれ
よばれは何所じゃ 地藏さんの奥や
奥屋の子どもは かしこい子ども
(高砂市)

お月さん、年なんぼ
十三、七つ まだ年しや若い
この子を産んで あの子を産んで
だあれに抱かしよ お万にだかしよ
お万 どこいた 油買いに 酢買いに
油屋の門で 油一升まいた その油どうした

太郎どんの犬と 次郎どんの犬と
 みいんななめてしもた
 その犬どうした 太鼓に張って ドンドコドン
 ドンドコドンのドンドコドン
 (西 淡 町)

2. こいこい木挽きさん

こいこい こびきさん
 お茶飲んで ひきんか まだ日は高い
 (小 野 市)

出典 ふるさとのうた第1集
 小野市観光協会編



かつて、三田市から播州あたりまでは、松の産地であったので板を挽く木挽きさんも多かったようです。木挽きさんの動作を連想しながら子どもをあやしたと考えられます。

きっこのこびきさん お茶飲んでひきんか
 まだ昼早い 足元よろよろ
 (加古川市)

きっこのこびきさん お茶飲んでひきんか
 まだ昼早い 服吸うてひきんか
 (高 砂 市)

きっこのこびきさん お茶飲んでひきんか
 まだ昼早い 足元ひよろひよろ
 (稲 美 町)

3. 日が照り婆さん

日が照り婆さん 日が照っておくれんか
 柳の下で穂なと捨ろて
 はったいひいて食わしましよ
 (高 砂 市)

出典 兵庫のわらべ歌
 加古川市神野町
 採譜 山本 徹一



陽の当たる場所で、ひなたぼっこしながら、子どもをあわす歌です。

麦の収穫期にはったい粉を作って屋敷の周りにまくとマムシが寄ってこないという呪いがありました。

日が照り婆さん 日が照っておくれ
 柳の下で粉なと挽いて
 はったい挽いて 食わしましよ
 (加古川市)

4. きっきのばあさん

きっきのばあさん 白ひきに 来なんせ
 白の代はなんぼ 一升五合 そりやま高きやあ
 高くても安くても 白ひきに 来なんせ
 (温 泉 町)

初を脱穀する磨臼引きのリズムは、赤ん坊をあやす調子にも似ています。

5. 高い山へほろか低い山へほろか

高い山へほろか 低い山へほろか
 とても低い山へどんぶりことほったろ
 高い山へほろか 低い山へほろか
 この子よい子じゃおうちへつれていの
 (津 名 町)

「ほったろ」で川へ流す動作をします。「つれていの」で抱きしめてほほをすりよせます。

6. いいちくたあちく

いいちく たあちく たあまんご

かえでりゃ ひよこ
羽が生えたら ばーたばた

(千種町)

去年のややと 今年のややと
ややどうしあわせて ぼんべんぼん

(加古川市)

出典 東播磨の民俗
採譜 落合美代子

おいさま こいさま おいどがひよこりてました ひょう たん のさ きに
あちちをすえて あつ やか なし やか なほ とけ んけん
いっちょめにちよめさんちよめのかどでおみずながして
ふねのせんとうさん このこやないかいな このこのじよを
こぶねにのせて ふかいかわへはめよか あさいかわへはめよか
とてもかなわん ふかいかわへどんぶりこ

歩き始めた幼児に、身振り手振りで笑わせながら歩行への興味付けをします。

ちっちく たっちく卵 かいでたらひよこ
羽が生えたらばあばた
大きくなったらコケッコ

(高砂市)

いっちく たっちく みょうれん そうれん
いっちくりんの花が咲いて リーンそうない

(出石町)

7. こっちやたんぼ

こっちや たんぼ たんぼで こっちや
みみこ みみこで かいくり
掻い繰りわあ~い

(出石町)

赤ちゃんをひざに乗せ、左右の手をわきの下に
もっていき、最後に手を回して万歳をします。

8. おいさまこいさま

おいさま こいさま
おいどがひよこりて出ました
ひょうたんの先に あちちをすえて
あつや 悲しや かなぼとけんけん
一丁目 二丁目 三丁目の角で
大水流して 舟の船頭さん
この子やないかいな
この子の じよを 小船に乗せて
深い川にはめよか 浅い川にはめよか
とてもかなわん 深い川へどんぶりこ

大まき 小まき 小まきの上に
あちちをすえて
深い川へはめよか 浅い川にはめよか
よっちゃんのかどへ
大水打って 舟を渡して
どんぶりどんぶりしよ

(加古川市)

かんぐり かんぐり 宮かんぐり
お姫はんの籠と 天神さんの駕籠と
どっちが大きい ひょうたんほど大きい
ひょうたんの先に あつつをすえて
あつや 悲しや 南無阿弥陀仏
深い川へはめよか 浅い川にはめよか
はめよなら 深い川へどんぶりしよ

(加古川市)

9. まいまいこんこ

まいまいこんこ まいこんこ
目がもうたら やいとしよ

(加古川市)

まいまいこんこん きりこんこん
目がもうたら やいとしよ

(加古川市)

10. あがり目さがり目

あがり目 さがり目

くるりとまわって 猫の目

(温泉町)

指を目じりに当てて、目の表情をかえるあやし歌です。

..... ぐるりとまわって にゃんこの目

(加古川市、加西市)

11. にらめっこ

だるまさん だるまさん にらみっこしましよ

笑ろたら 負けよ うんとこどっこいしよ

(篠山市)

採譜 前川 澄 夫

だ る ま さ ん だ る ま さ ん に ら み っ こ
し ま し ょ わ ろ た ら
ま き よ う ん と こ ど っ こ い し ょ

「うんとこどっこいしよ」で怒った顔をします。

大黒さんとえべっさんで

にらめごっこしましよ

負けたらだめよ うんとこどっこいしよ

(津名郡一宮町)

..... あっぷっぷ

(相生市)

... 笑ったら負けよ

(但馬、丹波)



12. ねかせ歌 (15曲)



赤ん坊を眠らす「ねさせ歌」は、歌の中に「ねんねん」など同音の反復が見られ、幼児の耳に心地よい音となって届き、眠りを誘うという歌です。

このように「ねさせ歌」の本質のひとつは、リズムの継続です。祖母や母らの愛に包まれながらの柔らかな歩みの中で、歌のリズムとともに子どもが身体をゆられて自然に眠りに落ちていくようになります。

1. 坊やはよい子だ

ねんねんころりよ おころりよ
坊やはよい子だ ねんねしな
坊やお守はどこへ行った
あの山越えて 里へ行った
里の土産に何もろた でんでん太鼓に 笙の笛
(加西市)



古く江戸時代から親しまれてきた「ねさせ歌」に、“坊やはよい子だ”があります。全国的に分布しているので、日本の子守り唄の典型といえましょう。

この歌を原型として、各地に歌詞が様々に変化しています。

..... 里の土産になにもろた
ねんねん太鼓に 笙の笛
鳴るかと思たら鳴らなんだ
こんだ(今度)行ってきたら
鳴るやつを 買うてきて あげましよう
(青垣町)

ねんねんころろん ねんねしな
ねんねのお守はどこへいた
..... 笙の笛 笙の笛もてこい 吹いてやる

ふいてもふいても鳴らぬ笛
も一つもてこい吹いてやる

(千種町)

..... 笙の笛 おきあがりこぼしに
犬張子

(加古川市)

..... にんじん大根に 笙の笛
笙の笛は鳴らなんだ

(加古川市)

..... 笙の笛 その笛吹いたら
ねんねしな~

(東条町)

2. 寝たら山の

ねんねんよいよ
寝たら山の雉の子
起きたらおかめ(狼)がとつても
ねんねんよいよ

(東条町)

この歌も地域によって様々な歌詞があります。

ねんねんね

寝たら山の雉の子
起きたらおかめ(狼)がとってかむ
ねんねんねんね よいよいよ
守りは守りづれ 子は子どもづれ
大きな姉さん男連れ

(小野市、千種町)

ねんねんねんよ

起きたらおかめ(狼)がとんでかむ
よーい よーい よーいよ
この子が寝た間に餅ついて
あっちの子にも一つやり
こっちの子にも一つやり
この子にやるのがたらなんだ
こんだついたら みなやろぞ ねんねんねんよ

(三木市、市川町)

3. ねんねなされや

ねんねなされや おやすみなされな
あすはつたちち みやまいりな
みやについたら 何ちゅうておがむな
きつこの子が まめなようにな
ねんねする子にや 赤いベベ七つな
起きて泣く子にや帯一つな

(篠山市)



かなり古くからの伝承歌のようです。メロディも歌詞も地域によって様々になっています。

ねんねしなされ おやすみなされ
あすはお前さんの誕生日
ねんころさいころ 酒屋の子
酒がほしけりや 酒のまそ
酒はかるうてよう飲まん

乳ならあもうて 飲むけれど
ねんねした子にや 赤いベベ七つ
起きて泣く子にや 帯一つ
ねんねした子は よい子やさかい
起きて泣くは 面にくい
ねんねんころいち 子は竹のいち
竹にもたれて ねんねしな
ねんねしなされ おやすみなされ
あすはおはよに おきなされ

(柏原町)

ねんねしなされ今日は25日よ
あすは6日みやまいりよよ~ほいよ~
ねんねする子に赤いベベ着せてよ
起きて泣く子に縞のベベよ~ほいよ~
ねんねねんねとねる子は可愛いよ
起きて泣くは面憎いよ~ほいよ~
ねんねころいち 天満の市はよ
大根そろえて舟に積むよ~ほいよ~
オバんどこ行く味噌腰さげてよ
わしは歯が無うて豆腐買いによ~ほいよ~
家のおとつたんは酒に酔うてこけてよ
赤いテンテン泥だらけよ~ほいよ~
向こう見なされお月さんがでたぞよ
まあるい大きなお月さんよ~ほいよ~
向こう見なされ自転車が来るよ
リンがなるまでよけらんとけよ~ほいよ~
宮に参りて何というておがむ
一生この子がまめなようによよ~ほいよ~

(稲美町)

「向こう見なされ」の二行は、稲美町岡の梅田ふじ彗さんの創作です。取材に伺った際、大きな声で唄ってくれました。

ねんねしなされ おやすみなされ
鳥が唄うたらおきなされ
鳥が唄うても まだ夜は明けぬ
明けばお寺の鐘がなる
鐘がなりますお寺の鐘が
一に聞こえて 二に響く こいこい

(川西市)

うちのややこは 今寝るさかりよ
だれもやかましゅう 言うてくれるなよ

宮に参ったら何というておがむ
この子一代無病息災によ

(洲本市)

ねんねしなされ おやすみなされよ～
朝はどうからおきなされ よ～いよ～
ねんねしなされ 一夜も二夜も
せめて 三夜も寝ておくれ
ねんねしなされ
今日は25日 あすは6日 みやまいり
宮へ参ったら何というておがむぞ
一生この子がまめ(息災)なように

(加古川市)

4. 天満の市

ねんねんころいち 天満の市は
大根そろえて 船に積む
船に積んだら どこまで行きやる
木津や難波の 橋の下
橋の下には かもめがいやる
かもめとりたや 竹ほしや
竹がほしけりゃ 竹屋に行きやれ
竹はなよなよ 由良之助

(姫路市)

大阪を代表する子守歌ですが、千葉県あたりまで分布が認められています。

兵庫県でも瀬戸内地域を岡山方面まで唄われています。天満、木津、難波など大阪の地名が歌詞の中に見えます。

ねんねんころいち 天満の市は
大根そろえて 船に積む
船に積んだら どこまで行くぞ
木津や難波の 橋の下

橋の下には 狼がおるぞ
おかめとりたや おそろしや

(加古川市)

ねんねころいち 天満の市で
大根そろえて 船に積む
船に積んだら どこまで行きやる
行けば難波の 橋の下
橋の下にはかもめがおりやる
かもめとりたや 網ほしや

(篠山市)

5. ねんねんころいち

ねんねんころいち 寝る子は可愛い
起きて泣くは 面にくい
ねんねんころいち 子は竹のいち
竹にもたれて ねやしんせ
ねんねんころいち ころ竹のいちよ
竹にもたれて 寝た心地よいよ
ねんねする子は 赤いべべ着せてよ
ねんねせん子は 縞のべべよいよ
あの子見やんせ 赤べべ着てじゃ
親は錦の ボロ下げて
わしの友達や 芋の葉の露よ
一つ違うたら ぶっしやりと
わしの思いは お釜のこげよ
ままにならぬと 焼いている
ふくささばきは 知らねど今日の
お茶のかよいが してみたい
こいよこいよと ことづてばかり
まこと恋なら 文よこせ

(加古川市)

広く関西地方全般に伝播している子守歌です。歌詞は、前述した“ねんねなされや”や“天満の市”とそれぞれが互いに混合している様子がわかります。

6. ねんねんばっぼを

この子はよい子じゃ ねんねしいな
この子がねんねを したる間に
ねんねんばっぼを ついといて

起きたら目覚まし 食べさそよ
 ねんねんころりや おころりや
 坊やがねんねをしとる間に
 坊やお守りは どこへ行た
 あの山越えて 里へ行た
 里の土産に 何もろた
 一に香箱 二に硯 三にさらさの 紐もろた
 紐はもろたが まだくけん
 くけて見せましょ はやばやと
 はやの帯して 伊達こいて
 伊達の小褌に 血がついた
 血ではないもの 紅じゃもの
 伊達の小褌に 紅つけて
 紅はよい紅 化粧の紅

(千種町)

この歌を寄せてくださった新宮町牧の大西鈴代さんは、母が孫を寝かしつける時に、添い寝をしながらやさしく胸の上をトントンたたきながら唄っていましたが、と書き添えてありました。

ばっぼとは餅の意味です。

ねんねんばっぼ
 この子はよい子じゃ ねんねしな
 この子がねんねをしとる間に
 ばっぼを トントンついといて
 この子が起きたら 食べさせよ
 ねんねんばっぼ

(新宮町)

ねんねんよいよ よいよ
 ぼうやのねたまに ばっぼついて
 あっちの子にも一つやろ
 こっちの子にも一つろ
 ねんねんよいよ いやよいよ

(篠山市)

7. ねんねんよ

ねんねんよ～ねんねんよ
 ねんねんよいよい ねんねんよ

(温泉町)

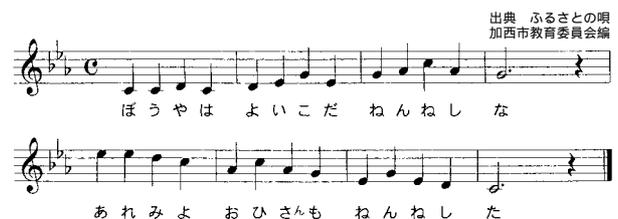


この歌は、二つの歌のメロディが組み合わさってできていると考えられます。

8. あれ見よお日さんも

ぼうやはよい子だ ねんねしな
 あれ見よ お日さんも ねんねした
 かあかあからすに ちゅんちゅん雀
 一緒にねむると とんでゆく
 坊やも泣かずに ねんねしな
 お日さんの めざめる明日まで

(加西市)



9. いけばとっけ

行けばとっけで 帰れば榎 道の悪さが若宮や
 (川西市)

とっけとは川西市若宮から南方面の伊丹市に通じる峠のことです。

10. 加茂地方の子守歌

加茂の宮さん 千体きたい
 上に宮さん 愛宕さん

中にしょんぼり 庚申さん
 加茂のいわたは 問わいでもわかる
 門にある松 二本松

(川西市)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編

大ゆきこゆき ゆきのふるばんに
 だれかひとりなくこがほしい
 あらいつちゃ こんばんわ こっちいつちゃ こんばんわ
 大ゆきこゆき ゆきのふるばんに
 だれかひとりなくこがほしい

11. 篠山地方の子守歌

ねんねんころり おころりよ
 春の夕べはおちちのもやよ
 お山のおさるもねんねした
 霧のお里は 紅の橋
 ころり ねんころ ぼうやの国は
 丹波篠山 歌の国

(篠山市)

14. 志方地方の子守歌

ねんねんよう ねんねんよう
 よい子よ泣くなよ ねんねんよう
 抱くは母ぞ 撫でるも母ぞ
 よい子よ泣くなよ ねんねんよう
 ねんねんよう ねんねんよう
 よい子よ泣くなよ ねんねんよう
 神もよい子を 守らせたもう
 よい子よ泣くなよ ねんねんよう

(加古川市)

12. 加西地方の子守歌

とんとんとろりと なる音が
 坊やおねまに まだこぬか
 こなけりやむかえにまいりましょう
 海、山越えて 鬼が島
 鬼のいぬ国 ねんね島

(加西市)

出典 めんめらの生きた道
楽譜 山本 慎一

ねんねんよ ー ねんねんよう
 よいこよなく なよ ねんねんよ
 いだくは ははぞ ー なでるも ははぞ
 かこみも よいこを まもらせ たもう
 よいこよなく なよ ねんねんよう



13. 千種の子守歌

大雪 小雪 雪の降る晩に
 だれかひとり 泣く子がほしい
 あっちいつちゃ今晚は こっちいつちゃ今晚は
 大雪 小雪 雪の降る晩に
 誰かひとり 泣く子がほしい

(千種町)

15. 居組の子守歌

泣くないや泣くないや 何が不足で泣くだいや
 米はある金はある 何が不足で泣くだいや
 あ～ねんねんせえや ころりんせえや
 泣くないや泣くないや ケンケン山の雉の子が
 泣いていて鷹になあ 泣いて鷹にとられるど
 あ～ねんねんせえや ころりんせえや
 泣くないや泣くないや 泣くとお山のお吉の子
 だんまりやなあ家のなあ

だんまりや家のかかさんの子
あ～ねんねんしてごせえや ころりんせえや
(浜坂町)

居組は漁師の町です。若いお母さん方も漁の手伝いに忙しい毎日を送っています。子守りは主にお年寄りの役目でした。後ろ手で赤ん坊を背負って優しくたたきながら唄いました。



13. 守り子の歌 (16曲)



子守り奉公の習慣は、かつて全国各地にありました。いわゆる「口べらしで、7歳～12歳の主に女の子が、故郷を離れ、遠い村や町に住み込みながら雇い主の子どもを守りする仕事をこう呼びます。

「守り子の歌」は、貧しさゆえに出されたつらい仕事の中で唄われた歌で、一種の労働歌と言えます。

歌の内容は、雇い主への悪口や子守りという仕事の辛さを唄いこんだものが主になっています。

日本を代表する「守り子歌」は、“五木の子守歌”で、天草地方から奉公に出された娘たちが、郷里の福連木あたりで古くから唄われていた歌を替え歌にして唄ったものだといわれています。

全体的には、地域に根ざしたものが多いといえましょう。

1. 野間の守り子歌

ねいよねいよと 尻たたかれて
何の寝ましょよ たたかれて ロイロイロ
お前知りんか 伊丹が焼けて
昆陽の大工さんが 繁盛した ロイロイロ
おんばうまいもんや 鯛くて食わせ
乳もようはる 子も肥える ロイロイロ
かわいかわいは おんばのならい
なんがかわいかる ひとの子が ロイロイロ
(伊丹市)

2. 母子の守り子歌

ねんねしなされ おやすみなされ
起きて泣く子は 面憎い
ねんねやぁと言うて 寝る子はかわい
起きて泣く子は 面憎い
門に橘 戸にもたれ花
うちの様子を きくのはな

(三田市)

昔、裕福な家では住み込みの乳母をやっていました。そんな乳母は自分は御馳走を食べさせてもらって、他人の子に乳を飲ませているが、自分の子は家で姑に育てられいると思って「かわいかわいはおんばのならい、なんがかわいかる他人の子が」と唄ってやめさせられたという話が残っています。

3. 加古川の守り子歌

この子憎いやつ 目の玉抜いて
道の真ん中に ほりうめる

人が通れば 南無阿弥陀仏
親が通れば 血の涙

(加古川市)

4. 石守の守り子歌

咲いてすぼんで また咲く花は
須磨の前田の かきつばた
明石の殿さん 尾張の国を
昼のあかいのに 高提灯
明石樽屋町 茶碗屋の娘
歌につくろか 絵に描こか
明石あかいけど 大蔵谷暗い
まだも暗いのは 一の谷

ここは一の谷 敦盛さんの
お墓どころか 痛わしや
大阪大阪と 皆言うてやけど
大阪いよいか すみよいか
わしは備前の 岡山育ち
米のなる木は まだ知らん
あの子憎いやつ よそからうせて
じげの守り子を よせらかす

わしはいにたい かあさんとこへ
戻りともない 親方へ
奉公する身では しゃないけれど
今年一年 塩ふみに
鐘がなったら いのいの言うてや
ここは寺町 いつも鳴る
きのう北風 今日南風 あすは浮き名の巽風

お婆どこいく 三升樽さげて
嫁の在所へ 孫抱きに
思うて通えば 千里も一里
逢わず戻れば また一里
思うてみやんせ 十五や六で
一人夜道が 通わりよか
思い出しては 写真鏡を眺め
なぜに写真がもの言わぬ

来いよ来いよと ことづてばかり
まこと恋なら 文よこせ
来いと言葉の かからん所へ
行かれますかい 恥ずかして

お前さんのように ご器量がよけりゃ
知らん他所から 文が来る
今の若い衆の 雪駄(せきら)の音は
一里聞こえて 五里ひびく

今の守り子が 寺子にほれて
七つ上がり を 待ちかねる
わしの嫌いな は あの餓鬼ひとり
あいつのけたら みなかわい
わしはあの子に どういわれても
たとい乞食と 言われても
身上ようても 貧乏あなずるな
今はようても 後や乞食

お月さんのような 丸い丸い丸い
心変わらん 殿がほし
世帯もたすりゃ 茶碗のめげも
たりになります 塩入れに
旦那おかえりか 門の戸が開いた
酒のかんしょか あも焼こか

親が甘いので 子の性(しょう)が悪い
頭一つも どやさんせ
うちのこの子は よう泣くいじる
守りに難儀を かけなさる
かわいかわいは お乳母の ならい
何がかわいかる 他人の子が
何ぼ泣いても この子は かわい
わしのお飯の たねじゃもの

守りよ守りよと 守り楽そうに
守りが楽なら してみやれ
守りの大将さん 遊んでおくれ
豆の三粒も よけあげろ
わしの兄弟は 学校の先生
椅子にもたれて 本を読む
椅子にもたれて 本読むけれど
月に3円で 日を送る

(加古川市)

5. 黒田庄の守り子歌

ねんねん よいよ
よい子の守りには 誰を置こ
新町米屋の お市置こ

お市が来たら 何をさそ
おむつき洗ろたり 守りしたり
それが嫌なら 去いんでくれ
出ては去ぬけど 道知らん
道を知らねば 送らそう
柳の下まで 送らそう
柳の下から わし一人 ねんねん よいよ
(黒田庄町)

寝たら子も楽 守りも楽
守りというもん つらいもん
朝から晩まで 負いつめて
親にゃ叱られ 子にゃ泣かれ
他人にゃ楽げに 思われて
お飯というたら 麦の飯
お汁というたら 干し菜汁
(千種町)

6. 吉川の守り子歌

ねんねしなされ おやすみなされ
朝はとうからおきなされ
ねんねする子に赤いべべ着せて
起きて泣く子に縞のべべ
ねんねころいち ころ竹のいち
竹にもたれて ねた心地
守りよ子守りよ なんぜ子を泣かす
後の子守りが尻つめる
守りよ子守りよ なんぜ子を泣かす
泣かしゃしませぬ 泣きなさる
どこの誰さん
なんぜ色黒い蛸の黒べか 牛糞か
あの子よい子や ぼたもち顔や
黄な粉つけたら 尚よかる
(吉川町)

7. 千種の守り子歌

ねんねしなされ 寝た子はよい子

8. 安富の守り子歌

この子よい子じゃ ぼたもち顔じゃよ～
黄な粉つけたら 尚よかる ヨイヨイ
ねんねする子にゃ 赤いべべ着せてよ～
起きてやだけりゃ 縞のべべよ～ ホイよ～
(安富町)



9. 気比の守り子歌

守りはえらいもの これから先は
雪はちらつく 雪はちらつく
子はなくし コイコイコイ
ねんねせというて 寝るよな子なら
守りゃいりゃせぬ 守りゃいりゃせぬ
お主守りで コイコイコイ
ねんねせえや ねんねせえや
起きて泣く子は 起きて泣く子は
面憎い コイコイコイ
ねんねせえや まだ夜は明けぬ
明けりゃお寺の 明けりゃお寺の
鐘がなる コイコイコイ

(豊岡市)

人にゃ樂げに思われて
コイコイコイ コロンデコ～イ
コイコイコイ
なんぼ泣いても この子はかわい
ままの種じゃと思やこそ
ヨイヨイヨイ コロンデコ～イ
ヨイヨイヨイ
山の木の葉が 紅かなる見なれ
葉が落ちたら雪が降る
コイコイコイ コロンデコ～イ
コイコイコイ

(温泉町)

10. 与布土の守り子歌

上の橋から 下の橋までも
うとてまわるのが守りの役
まわるのが守りの役
守りはつらいもんじゃ 子に責められて
人に樂げに思われて 樂げに思われて
なんぼ泣いても この子はかわい
飯の種じゃと思やこそ 種じゃと思やこそ
(山東町)

但馬は、江戸時代から冬季に出稼ぎに出るのが
当たり前でした。大人は、丹波へ凍り豆腐（高野豆
腐）造り、灘や伏見に酒造りに出かけました。

子どもも例外ではなく、7、8歳になると男の
子は、牛飼い奉公に、女の子は子守り奉公に出て
口べらしをしたといひます。

少し大きくなると、鳥取や京都まで奉公に出か
けたといひます。

12. 黒石の守り子歌

ねんねしなされ 寝る子はかわいよ
守りもたすかる 子も樂なよ ホイヨ
ねんねしなされ おやすみなされ
起きて泣く子は 面憎いよ ホイヨ
泣いてくれなよ 泣く子の守りは
叩き抓めると 思われるよ ホイヨ
(篠山市)

11. 塩山の守り子歌

ねんねてくれ ねてさよくれりゃ～
守～りも樂なし 子も樂な
ヨイヨイヨイ
コロンデコ～イ ヨイヨイヨイ
守～りしょまいもの 子にゃいじられて

おしんど良く聞け お話ししましょ
守りを悪すりゃ子にあたる ホイホイ
うちの親方 金米糖の顔よ
甘い顔してきつう使うよ ホイホイ
(津名郡一宮町)

この歌を採集された浜岡先生は、「淡路の女の子は、8、9歳になると播州に、子守り奉公に出された。子守りだけでなく、炊事洗濯など家事も言いつけられた。子守りのときに女将さんに見つからないようにこんな歌を唄った」と教えてくれました。

13. 沼貫の守り子歌

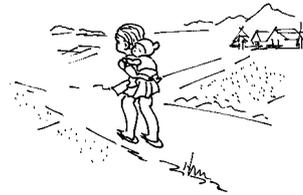
ねんねしなされ おやすみなされ
明日はおはよに 立ちなされ
明日はおはよに 立ちなされ
ねんねしたかと 思えばまたも
起きて泣き出す 面憎や
起きて泣き出す 面憎や
ねんねころいち 子は竹のいち
竹にもたれて ねた心
竹にもたれて ねた心
ねんねした子は しんからかわい
起きて泣く子は 面憎い
起きて泣く子は 面憎い

(氷上町)

15. 小路谷の守り子の歌

だんな大黒 おしんど恵比寿よ
恵比寿また大黒 福の神
くるりっきん こうやった ちょうめっかい
(洲本市)

柏原山のほうから、浜へ下りてきて買い物する道中、この歌を大声で唄いながら坂を上下すると、一人でも怖くないし、坂道も早く上がれる呪いを歌いました。



16. 野島の守り子の歌

淡路島見りゃ 去にとてならぬ
去んでここ見りゃ また来たい
勤めの辛さに 出て山見れば
雲のかからぬ 山は無い
胸に千束の 茅たくけれど
煙出さなきゃ ひた知らん
守りよ守よと たくさんそうに
わしもいやあり 親もある
坊やよい子だ ねんねこしゃんせ
ねたら母さんに 便り書く

(北淡町)

氷上郡氷上町新郷は、かつて沼貫村新郷と呼ばれ、草深い農村地帯であったといえます。

14. 尾崎の守り子の歌

ねんねしなされ お休みなされ
朝はとうからおきなされ ホイホイ



「赤いたんすは姉さんに
黒いたんすはお母さんに
白布一枚 ばばさまに
おから頭巾 爺さんに 爺さんに」

(加古川市)

30. おいち おいちと

おいち おいちと おいちのちぎり
おいち十七 女の盛り
弥吉二十五で 男の盛り
連れに誘われ お伊勢まいり
お伊勢参りのその留守の間に
うちのばさんは 悪性の人で
隣近所のお医者を呼んで
なんと医者さん 薬はないか
毒の薬を下さるならば
小判千両 今でも出すが
そこで医者さん 小判に迷て
河原よもぎに 毒薬混ぜて
茶瓶磨いて 上茶を煎じ
おいち茶々飲め 茶々銭とらぬ
おいち知らずに ガブリと飲んで
つめの先まで紫色に
腹の子まで ぴりりと動き
風の吹く夜はお伊勢に聞こえ
お伊勢土産のおしろい箱を
買うてきたのに おいちはおらぬ
おいちどこへ行つたと ばさんに問えば
おいち お墓へ参ります
墓のぐるりを三遍もうて
そこにいるのは おいちじゃないか
違いござらんおいちでござる
わたしゃ ばさんの毒のまされて
死んで墓場の影からのぞく

(高砂市)

お市 お市と お市は血義理
お市十七 女の盛り
弥吉二十五で 男の盛り
連れに誘われ お伊勢まいり
お伊勢参りのその留守ごとに
うちのばさんは 悪性の人で

隣近所のお医者を呼んで
なんと医者さん 薬はないか
毒の薬を下さるならば
小判千両 今でも出すが
そこで医者さん 小判に迷て
河原よもぎに 青色つけて
これを煎じて飲ましてみたら
薬てきめん よく効きますと
ばさん受け取り 大喜びで
お市帰りに ガブリと飲んだ
毒はお市に 一寸も効かず
ばさん神罪 てきめんあたり
お市死なずに ばさんが死んだ

(加古川市)



2. お手玉歌 (15曲)



お手玉遊びの前身は「いしなどり」と言って、いくつかの手ごろな大きさの石を地面に置いておき、そのうちの一個を空中にほうり投げ、地面に落ちるまでに、地面に置いてある石をすばやく掴み取っていくという遊びでした。

兵庫県でも「いいちこ」「いしなんご」といって、近年までよく遊ばれていたようです。

兵庫県では「お手玉」と呼ぶことはなく、「おじゃみ」「おじゃん」「おさくろ」「おさくら」など地域によって様々です。男の子には「じゃみけり」といって足の内側で、連続で蹴っていく遊びがありました。

1. おさらい

おひとつ落として おさら
おふたつおとして おさら
おみっつ落として おさら
おみんな おさら おてしゃみ おさら
おはそみ おさら おちりんこ おさら
お左こ しゃしゃりこ すっとな
中よせ つまよせ おさら
おでんむし おさら
しいるしるしる ちょんぎり おさら
お胸落として おさら
お袖かわかして おさら
小さい橋くぐれ 大きい橋くぐれ おさら
(赤穂市)

今回収集できたお手玉歌で、最も多かったのが「おさら」(おさらい)でした。この歌は、歌を唄いながらその歌詞どおりに動作をする、遊びと特に密接した歌です。

お手玉を数個使って遊ぶもので、お手玉の遊び方では「よせ玉式」というものです。少し大きめのきれいな布で作ったものを親玉と呼び、これを上に放り投げている間に下に並べたお手玉(子玉)を取っていくのがこの遊び基本の動作です。地面にあるお手玉を「さらえて」いくようにするので「おさらい」というのでしょう。全国的には地方によって「おさら～い」と伸ばしたり、「おさら」とつまったりする訛りがあるようですが、兵庫県では「おさら」というのが一般的です。

遊び方 お手玉5つを使って遊ぶ、うち親の玉一つ

おさらの動作の基本

親玉を放り投げ、受けたと同時に、下にある子玉を全部すくい取ってから下に落とす動作

おひとつ落としておさら

親玉を放り上げている間に下の子玉を1つ取り、親玉を受けてから親玉を下に落とす。と同時に下の子玉を全部すくい取り、下に落とす。

おふたつ おみつつ おみんな

上記と同様にするが、親玉を放り投げている間に下から取る子玉の数を2つ、3つと増やしていき、おみんなで4つ全てを取る

おてしゃみ

親玉を放り投げている間に、下の子玉を左手の上に乗せる

一度に乗らないときは繰り返す。

おはそみ

同様にして、左手指の間に下の子玉をはさんでいく。何回かする

おちりんこ

同様にして、左手の親指と人差し指で輪を作り、その手のひらへ全部乗せる

お左こ しゃしゃりこ すっとな

親玉と下の子玉を交互にすくう。親玉以外は全て左手で取る

「しゃしゃりこ」で左手のお手玉と右手の親玉を交換して、親玉以外は下に落とす

中よせ つまよせ

今落としたお手玉を全部一箇所に集めてつかみ、基本であるおさらをする

おでんむし

親玉を放り上げている間に、下のお手玉を一つ取り、親玉は手の甲に乗せてから手のひらを下にしてつかみ、下から取った子玉を離すと同時に次の子玉を拾う。くりかえす

しいるしるしる

前と同じ動作でお手玉全部を一緒につかみ、親玉だけを手の甲に残し、他の子玉は下に落としてから親玉を跳ね上げて、手のひらを下にして親玉をつかむ

お胸落として

お手玉をつかめるだけつかんで胸にあてるお袖かわかして

お手玉を全部つかみ、左袖にあてる

小さい橋くぐれ 大きい橋くぐれ

小さい橋では、左手小指を薬指の上に重ね、その薬指と親指でトンネルを作りその下をくぐらす

大きい橋では、左手指先を床につけて作り、同様にする

最後に基本の動作である「おさら」をする

おひとつ落として おさら

おみんな おさら

おてしゃみ おてしゃみ

おてしゃみおとして おさら

おっかも おっかも

おっかも落として おさら

おちりこ おちりこ

おちりこ落として おさら

中よせ つまよせ おさら

ち~やん か~やん 遊びんか

やっちょめ やっちょめ 落として おさら

おってん ふ~し ふ~しでおさら

おんばしゃみ しゃみ しゃ~みで おさら

し~ず し~ず し~ずでおさら

おおしし おおしし おおししでおさら

おおそで おおそで おおそで おおそで

おそでおさら

おてばたけ おてばたけ

ひっかけて たたいておさら

お馬乗り換え お馬乗り換え 乗換えでおさら

たたきのおっさん おっさん たたいておさら

うどのた~ま た~ま た~までおさら

おじいの てさげ てさげ てさげでおさら

おばあの きんちゃく きんちゃく

きんちゃくでおさら

やれこら どっこいしょ

おっちょか ちょっかい

(加古川市)

おさら おひとつおいて おさら

おさら おふたつおいて おさら

おさら みつつおいて おさら

みんな さらえて おさら

左右にトン おっかい橋くぐれ

さらえて おさら

小さい橋わたれ さらえて おさら

(西宮市)

おひとつ おじゃみ おひとつ

おじゃみ おひとつでおさら

おふたつ おじゃみ おふたつ おじゃみ

おふたつでおさら

おみつつ おじゃみ おみつつ おじゃみ

おみっつでおさら
 おてしゃみ おてしゃみ おてしゃみ ...
 はろうておさら
 おつかみ おつかみ おつかみ ...
 おろしておさら
 おちりんこ おちりんこ おちりんこ ...
 落としておさら
 おっぴきざかりき おっぴきざかりき
 おっぴきざかりき ...
 ささまめトン なかよせ つまよせおさら
 ちろりと からりと 手を引いて
 やつとこ やつとこ やつとこさんでおさら
 おん馬乗り換え おん馬乗り換え ...
 おん馬乗換えておさら
 おおきい橋くぐれ おおきい橋くぐれ ...
 ちいさい橋くぐれ ちいさい橋くぐれ ...
 みなさんさようなら

(神戸市)

おひとつ落といて おさら
 おふたつ落といて おさら
 おみっつ落といて おさら
 おみんな落といて おさら
 おてしゃみ おてしゃみ おてしゃみ おさら
 おつかみ おつかみ おつかみ おさら
 おはさみ おはさみ おはさみ おさら
 おちよりんこ おちよりんこ
 おちよりんこ おさら
 お左 お左 お左 おさら
 ばらりこしょ 中とって
 すま(隅)よせ おさら
 ちよ橋くぐれ ちよ橋くぐれ
 ちよ橋くぐった おさら
 大橋くぐれ 大橋くぐれ
 大橋くぐった おさら
 おってんぶし おってんぶし
 おってんぶし おさら
 玉なし 玉なし 玉なし おさら
 塩漬け は~っちょ おさら
 おひ~ちゃんの むっしゃらけ
 おふ~ちゃんの むっしゃらけ
 おみ~ちゃんの むっしゃらけ
 おみんな乗せ ほい

(関宮町)

2. おじゃんざくらてんしょ

「おさらい」の類歌

おじゃん おひと おひと おひと
 ... おさら
 おふたつ おふたつ おさら
 おみっつ おみっつ おさら
 おさら おようで おさら
 おてしゃみ おてしゃみ おさら
 おつかみ おつかみ おさら
 おちりんこ おちりんこ おさら
 おんばしゃみ おんばしゃみ おさら
 お左 お左 おさら
 花が咲いた 花が咲いた すぼんだ おさら
 おうそで おうそで
 したてて たたいて おさら
 ちっこい橋こゆれ ちっこい橋こゆれ
 こゆっておさら
 大きい橋こゆれ 大きい橋こゆれ
 こゆっておさら
 おちりんばらり ちょい ちょいこ
 ちょい~こ ちょい おさら

(緑町)

この歌を採集された津名郡一宮町の浜岡きみこ先生は、「当時お手玉は絹の布に小豆をいれたもので、様々な遊び方があるが、この歌は、お手玉を七つ使って遊ぶ、通称「七つ」という遊びで、一人が遊び、周りの子が大きな声で歌った」と語ってくれました。

遊び方 お手玉7つを使って遊ぶ、うち親玉一つ

おさら
 親玉を放り投げている間に、下にある子玉の1個を取り、親玉を受けたと同時に、下にあるお手玉を全部すくい取ってから下に落とす
 おひと
 子玉が6個あるので6回おひと、おひと、おひとと唄う
 おふた
 親玉を放り投げている間に下から2つを片

手で取る
 おひだり
 親玉を放り投げている間に、右手で子玉を
 1個ずつ上げて左手で受ける
 おちりんこ
 同様にして、右手で玉を1つずつ左手に渡
 していく
 おんばしゃみ
 手の甲に親玉を乗せ、上にあげて、上がっ
 ている間に示指と親指で子玉をつかんでく
 るりと回してから、下に置く
 小さい橋こゆれ
 左手示指と親指で橋を作り、その下をくぐ
 らす

にある子玉を全部すくい取ってから下に落
 とす
 おふた
 上記と同様に下の子玉を二つ取る。どんど
 ん数を増やしていく
 ぱらりんてんしゃん
 ぱらりと放って手の甲に親玉を乗せ、それ
 を跳ね上げて手のひらを下にしてつかむ
 おふたざくらざくら
 親玉を上にあげて、上がっている間に子玉
 を二つつかみ、「ざくらざくら」で下に置
 く。「ぱらりんてんしゃん」をしてから以
 下、同様におのおの数だけ子玉を取ってい
 く

3. おじゃんおふた

おじゃん おふた おふた おふた
 おうみ おうみ おふた およう
 おいつ おうむ ぱらりん てんしゃん
 おふたざくら ざくら ぱらりん てんしゃん
 おみざくら ざくら ぱらりん てんしゃん
 およざくら ざくら ぱらりん てんしゃん
 おいつざくら ざくら ぱらりん てんしゃん
 おむざくら ざくら ぱらりん てんしゃん
 (南 淡 町)

おじゃみ おふた おみ~い かってこか
 トンキ

(篠山市)

おじゃみ おふた おふた
 おみい おみい おみな
 トンキリ ひとよせ ふたよせ
 かってこか トンキリ
 おみな じゃくら ひとよせ じゃくら
 おんなのかつけ みつひでこぼし
 出たよ 出たよ よう出た
 高い山から 低い山から 砂にまみれて
 ころころ トンキリ
 おたか 別れ 涙だ
 血出せ 血出せ 血だあせ
 のせた おたかの おおみいな

(篠山市)

おじゃみ おひと おふた おみい およう
 なってこしょ トンキ~
 おじゃみ ざ~くら
 おひと ざ~くら ざ~くら
 おみ~ も~どれ も~どれ
 いやですよ りんしょ

(竜野市)

遊び方 お手玉7つを使って遊ぶ、うち親の玉
 一つ
 おじゃん
 親玉を放り投げている間に、下にある子玉
 の6個を取り、親玉を受けたと同時に、下

遊び方 お手玉5つを使って遊ぶ、うち親の玉
 一つ
 まず、5つのお手玉を片手に握る

おじゃみ

親玉を手の中に残し、残りの子玉をくっつかないようにばら撒く

おひと

ばらまいた子玉の中から、親玉を握った手でひとつ取り上げて、親玉を手に残し、ほかの子玉と重ならないように放る

おふた

子玉を二つ取って同様に放る。どんどん数を増やしていく

なつてこしょう

親玉を握ったまま4つの子玉を指先で一箇所に集める

ト～ンキ～

親玉を握ったまま4つの子玉を指先で抑える

おじゃみ

集めた子玉を全部握りあげる

ざ～くら

親玉を手の中に残し、残りの子玉をくっつかないようにばら撒く

おひとざ～くら

ばらまいた子玉の中から、親玉を握った手でひとつ取る

さ～くら

親玉を手に残し、ほかの子玉と重ならないように放る

おみ～も～どれも～どれ

子玉を3つ一箇所に集める

いやですよりんしょ

親玉を手の中に残し、残りの子玉をくっつかないようにばら撒く

4. 坊さん山行つて

坊さん 山行つて いばらにひっかかて
あいたたといよいるまに ばっさり
おにおいや おかわいや おにおいや
おかわいや ばっさり
おさらまんで おふじする おさらまんで
おふじする ばっさり
さんがん さらりと さらしのてぬぐい

おとしてふじゅうする ばっさり

おにをくて おしりない

おにをくて おしりない ばっさり

いちをくて ご～ない

いちをくて ご～ない ばっさり

おおみなどり おおみなどり ばっさり

(加古川市)

出典 めんめらが生きた道
採譜 山本 嶺一



1. ぼんさん やまーいって いばらに ひっかかつて
2. おにおいや おかわいや おにおいや おかわいや



あいたたといよいるまに ばっさり おみなどり
おにおいや おかわいや ばっさり



ばっさり

この歌は今回、東播磨地域からのみの採集となりました。

お手玉の遊び方は「寄せ玉式」です。

坊さん 山いて いばらにひっかかて
あいたというまに よいな
にごいや かわいや
にごいや かわいや よいな
さんざん さらりと
さんざん さらりと よいな
にごくて しりなり
にごくて しりなり よいな
おおみなどり おおみなどり よいな

(稲美町)

5. 天王寺のお猿さん

天王寺のお猿さんは 赤いベベが大層好きで
テテさん テテさん
昨夜よばれた
大鯛の吸いもん 小鯛の吸いもん
一杯おすすりなされ 二杯おすすりなされ
三杯目に肴がないとて
お腹を立てて テテさん テテさん

(加古川市)

6. 堂の東の豆どうぞ

ひい ふう みい よう
い~ むう なな や~ ここのや とう
東の堂の豆どうぞ
豆屋の看板の お多福さいさい
受け取った~ 受け取った
三夜の盃 受け取った
これからどなたに 渡しましょう
(加古川市)

7. おしろべさん

おしろべさん おんしろ しろ しろ
白木屋のお駒さん 才太さん
煙草の煙は 丈八さん
相手になるのはおこむらさん
ひや ふや みや いや
むや なや やや こや とお
とんとんたたくは 誰さんじゃ
しも町ごうや おじさんじゃ
おじさん何しにおいでたか
せきだがかわって 替えに来た
おまえのせきだは どんなんじゃ
うこんに紫 あいびろど
そんなせきだがあるものか
あるのにないとは 言うてくれな
やれやれ ごうわく 腹立ちじゃ
わしが出世をしたならば
もとの屋敷に倉建てて
倉のまわりに松植えて 松の小枝に鷹とめて
鷹のはごえに鈴つけて
鈴がじゃんじゃんするとき
爺さん 婆さん 楽しかる
ととさん かかさん 嬉しかる
うちの裏の鶯は 女房があって子がのうて
二十日鼠に子をもろて
いりぼし買いにやったなら
猫がみつけて ひとかぶり ふたかぶり
この天からくだったおいもかね
ひとつくらいか スカラカポン
(千種町)

お手玉歌で物語風の叙事歌として、最も全国的に伝播しているのがこの歌であるといわれています。人形浄瑠璃「恋娘昔八丈」で知られる、白木屋お駒と才三の恋物語を唄いこんだものです。当時江戸を中心に、瓦版などで全国に伝播していったといわれています。後半は、いくつかの手まり歌が組み合わさってできています。

わらべ歌は、口から口へと伝わるもので、意味のわからない言葉はそのまま類似音に転化されていきます。この歌も物語の主人公「才三」(さいざ)が「才太」(さいた)と訛化されているようです。

この歌での遊び方は、お手玉2~4個を交互に上げて受ける「投げ玉式」と呼ばれるものです。

8. じんじろげ

じんじろげ じんじろげ ど~れ
どんがらがっちゃ ほうりつらっぱの
つうやつ まんがりんよいよい
いなりにおしずし じんじろげ

じんじろげ ほーれ どんがらがっちゃ
ほーい ほーい

(北 淡 町)

9. 山陽山は霧深し

糸まりを両手で操るお手玉遊びです。上手くできる人は3個を上に入れて両手で遊びます。

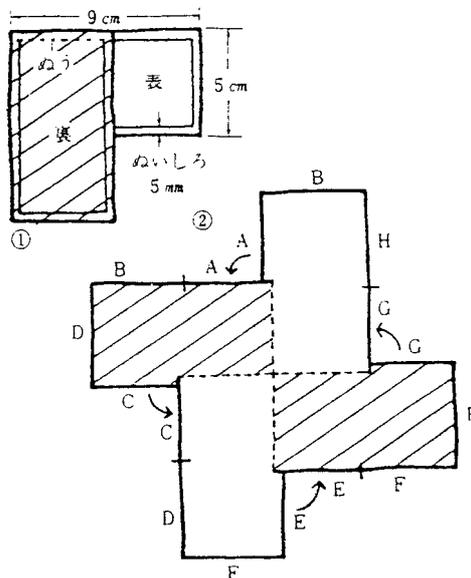
山陽山は 霧深し ちくまの川は 波荒らし
はるかにきこゆる もの音は
さかまくみずか つわものが
昇る朝日の はたの手に
ひらめくひまに くるくるくる
くるまばかりの じんどなえ
めぐる会津の ときの声
あわせるかいも 嵐吹く
敵はこのはた かきみだす
川中島の戦いは かたるもきくも いさましや
(安 富 町)

10. 三井寺の鐘の音

三井寺の鐘の音 すみわたるゆうぐれ
はつかりも かたたに
こえたてて おちきぬ
ひとりたてる からさきの大江松
雨か波かいつきても美し
おひとつおひとつおひとつおひとつ
落として おさら
おふたつおふたつおふたつ 落として おさら
小さい橋こぐれこぐれ こぐった
大橋こぐれこぐれ こぐった
おてじゃみ おてじゃみ 落としておさら
おはさみおはさみ 落としておさら
(安 富 町)



材 料 布(二種類) 5×9 cm各2枚 じゅずだ
ま・アズキなど
作り方 ①二種の布をぬい合わせます。
②中表にして①をぬい合わせ、A～Hの
順にぬいます。
Hをぬうときに、あずきやじゅずだま
を入れてできあがりです。



11. とんとん戸棚に

トントン戸棚に 金があるとは
誰がおおした おぼんようきけ
伊勢の町では 米が一升 十三文 十三文
高いもんじゃ 安いもんじゃ
買うて食え 買うて食え

(千 種 町)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編

トントン とだなに かねが あるとは だれが おおした
こんのおぼんが おおした おぼん ようきけ いせの
まちでは こめが いっしょう じゅうさん もん じゅうさん
もん たかいもんじゃ たかいもんじゃ こうてくえ こうてくえ

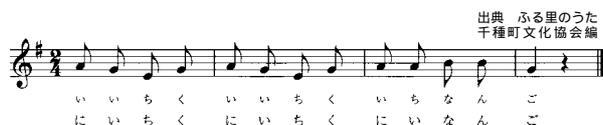
12. ひとつがら

一つ が～ら 二つ 山椒の木
三つ みかんの木 四つ ようろうの木
五つ 苺の木 六つ むかごの木

七つ なるてんの木 八つやわらの木
九つこんめの木 十でところの木
(千種町)

13. いいちくの歌

いいちく いいちく いちなんご
にいちく にいちく にいなんご
..... (10まで続ける)
いっちょのつぼ にちょうのつぼ 三... 四...
(千種町)



冒頭に記したお手玉の前身である「いしなどり」の歌です。

左手で輪を作り、その中へ右手で放り投げた石を入れていく遊びです。

いいちこてんと にいちこてんと
おくくをくくんで てんと
おずずをずっとして てんと
けっちんてんと おとなしてんと
いちもんがえし てんと
にもんがえし てんと
(小野市)

三つの直径3～4cmの石ころが遊び道具の、男子専用の遊びでした。

けっちんてんとで、ひとつの石を放り投げ、すばやくほかの石をつかみ、落ちてくる石とつかんだ石とで音を立てることを意味するそうです。

おとなしてんとは、音を立てないようにします。

14. ひとつと広いが

ひとつとひろいが 大阪
ふたふた降らんが 天気じゃ
みいみい見えんが めくらじゃ
ようよう養蚕 養父郡
いついつ出石の かつら屋

むうむう村岡 しぼりじゃ
なあなあ七尾の 天神
やあやあ山口 めぐさじゃ
ここのここのこけたら痛いじゃ
とうとう豊岡の こおりじゃ

(養父町)

この歌は、主に但馬地方に伝播していると思われます。

ひとつとひろいが但馬
ふたふた降らんが 天気
み～み～見えんが めくら
よ～よ～嫁さん じくとった
い～い～いんだが 悪い
む～む～昔が むけた
な～な～何でも 悪い
や～や～焼けたも 悪い
こ～こ～こけたも 悪い
と～と～跳んだが 悪い

(美方町)

ひ～ひ～ひろいが世界
ふ～ふ～降らねば 天気
み～み～見えねば めくら
よ～よ～嫁さんは 但馬
い～い～いんだら 悪いぞ
む～む～昔が むけたら
な～な～何でも こしらえて
や～や～焼けたら 悪いぞ
ここのつこけたら 怪我する
と～と～溶けたら 鉛

(香住町)

15. おんさかさか赤坂ど

おんさかさか 赤坂ど 四谷赤坂通り町
街道ずっと通り町
鼻緒が切れたら よこだにしょ
ひや ふや みや よ いつつや
むっつで ななや このつ どうで
うしろのぼ ちらちら落ちるは ちゃちゃの水
ちゃちゃのお水は 清水でホイ

(三田市)

この歌は、物語風の叙事詩です。論理的には意味がわかりにくいものですが、子どもらしい素直な空想の発展として可愛らしい歌詞になっています。

おんさのせ おん坂 さかさか 赤坂どん
よつやまどん
四谷赤坂麹町 お籠に乗るのは いくらです
五百です
もちとまからか おからかどん
おまえのことなら まけとくに
さい坂 どんどん どのおふらの
泥神さん 今日百年の日
ひい ふう みい よう
いつ むう なあ このつ
かえしてうしろのせ

(篠山市)



3. 羽根つき歌 (2曲)



羽根つきは、正月遊びとして主に女の子が遊びました。発祥は明らかではないらしいのですが、室町時代の「年中定例記」に「こきいた、こきのこ」とあって、当時は胡鬼板、胡鬼の子と呼ばれていたと考えられています。

当時は、グループで遊び、負けたほうに酒を飲ましたと記録にあり、かならずしも女性の遊びということではなかったようです。

この羽子板は年中行事の左義長(とんど)で焼かれていたこともわかっています。前述した胡鬼(邪気)を焼くという習慣であったと考えられます。

羽根つき遊びには「一人つき」と「追羽子つき」があります。

1. ひとめふため

ひとめ ふため みやこし よめご
いつやの むかし
ななやの やくし ここやの とお
(芦屋市)

今回収集できた羽根つき歌で、最も多かったのが「ひとめふため」でした。この歌は、江戸時代から明治にかけて京阪方面で最も流行したといわれています。

兵庫県では、瀬戸内の温暖な気候の地域で行われていたようで、冬に雪の降る但馬地方ではほとんど行われなかったようです。羽根はむくろじの実にきりで穴をあけ、鶏の羽を差し込んだものが一般的でした。

県下各地様々な歌詞があります

.....みめこし よめな いつやのむさし ...
(稲美町)

..... ここやのとんぼ ...
(三田市)

..... ここまでとんできな ...
(千種町)

..... このや どうお どうろのまえで
はねつく音は まずまず
いっかんかしました
(小野市)

..... このやで と~まった
(篠山市)

..... 遠目の中に 小さな鬼が
みのかさ担いで かくれんぼ
(竜野市)

..... ななやのやくし こうやのねずみ
藍食って墨食って そのけ長左衛門
(青垣町)

..... このやで とまって
豆腐屋であげた
(青垣町)

..... こらでとおついた
いちょう にんじん
さんしょうにしそう ごぼうにぬかご
七草はりはり くねんぼにとうがらし
(黒田庄町)

2.ひとりきな

ひとりきな ふたりきな
みんなで よってきな いつきても
むつかし なんでも
やかまし ここまで とんできな

(千種町)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編



この歌も藩政時代から唄われていた代表的な羽子板の歌です。



4. 縄跳び歌(8曲)



縄跳び遊びにまつわるわらべ歌は、主に長い縄で何人もが順番に跳んで遊ぶ長縄跳びの歌が多く採集できました。

1. 郵便屋さん

郵便屋さん 何時だえ
尾々田の坂から 日が暮れて
提灯とぼして エッサッサ

(温泉町)

今回最も多く採集できたものが「郵便屋さん」から唄いだすものです。

様々な歌詞がこの後続きますが、「序数発想」ともいべき数を中心として展開するものが数多く採集されました。

この歌を採集された長谷坂先生は、「郵政制度が確立されたのは、明治4年のことで、郵便物が全国どこからでも但馬の山奥まで配達されるようになった。野良に出ていたお百姓は郵便配達に珍しく、『郵便屋さん、何時だえ』と時を聞く。...それが子どもたちの縄跳び歌となり...」と著書で語っておられます。尾々田とは美方郡温泉町にある坂道のことです。

郵便屋さん 手紙が落ちました

1枚、2枚、3枚、4枚... 唄っていきます

(神戸市)

郵便屋さん 葉書が落ちました
拾ってあげましょ 1枚、2枚、3枚、4枚...

(千種町)

郵便屋さん 葉書が10枚落ちました
拾ってあげましょ 1枚、2枚、3枚、4枚...
とおでとうとうひろいました

(竹野町)

郵便屋さん おはようさん
葉書が3枚落ちました 拾ってください
たのみます それ 1枚、2枚、3枚、4枚...
郵便屋さんさようなら

(篠山市)

郵便屋さん おはいいり
はいよろし こんにちは
じゃんけんぼん まけたおかたは
でてちょうだい

(高砂市)

郵便屋さん走りんか
もうついもうつい12時や
1時、2時、3時、4時...

(稲美町)

郵便屋さん はいりなされ
10時がうったら めけなされ

(但東町)

2. 大波小波

大波 小波 大波 小波
まわせ まわせ まわせ

1回 2回 3回 4回 5回
 6回 7回 8回 9回 10回
 大波 小波 大波 小波
 まわして まわして どっこいしょ

(千種町)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編

お お な み こ な み お お な み こ な み
 ま わ せ ま わ せ ま わ せ 1 か い 2 か い 3 か い 4 ん か い
 5 か い 6 か い 7 な か い 8 ち か い 9 う か い 10 っ か い
 お お な み こ な み お お な み
 こ な み ま わ し て ま わ し て ど っ こ い し ょ

「おおなみ、こなみでは縄を左右に4回振り、まわしてまわしてで、大きくまわし、どっこいしょで縄をまたいでとまる遊びです。

県下各地で行われていました。

大波小波 ひっくりかえして おさら
 (温泉町)

大波小波 ひっくりかえして どんどこしょ
 (神戸市)

大波小波 風が吹いて 大波
 (但東町)

3. せんどうぐ

いちのまのせんどうぐ にのまのせんどうぐ
 さんまのさんべいがよっつ よんぼり ...
 (以下不明)
 (神戸市)

4. たこさんたこさん

たこさんたこさん 手を腰に
 たこさんたこさん 両手をついて
 たこさんたこさん あっぱっぱ
 (神戸市)

長縄に入って跳びながら、歌詞の通りに従う動作をして「あっぱっぱ」で縄を出ます。

たこさん ひこさん まわれ右
 たこさん ひこさん 手を腰に
 たこさん ひこさん 手をついて
 たこさん ひこさん あっぱっぱ
 (篠山市)

5. 千 松

おくさん おくさん おきなされ
 おきて 髪結うて 紅つけて
 お寺へしょこしょこ まいらんせ
 お寺のご門に 腰掛けて
 何が悲しゅうて 泣きなさる
 何も悲しゅうはないけれど
 私の弟の 千松が
 深山の奥の金堀に 一年経ってもまだ見えず
 二年経ってもまだ見えず 三年三月この春は
 鉄砲に撃たれて 死んだとナ 死んだとナ
 (千種町)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編

お お く さ ん お く さ ん お き な さ れ
 お き て 髪 結 う て 紅 つ け て
 お て ら へ し ょ こ し ょ こ ま い ら ん せ
 お て ら の ご も ん に こ し ょ け っ て
 な が ぜ 何 が 悲 し う て 泣 き な さ る
 な ぜ も 何 も 悲 し う は な い け れ ど
 わ ら ぬ 弟 の 千 松 が
 深 山 の 奥 の 金 堀 に 一 年 経 っ て も ま だ 見 え ず
 二 年 経 っ て も ま だ 見 え ず 三 年 三 月 こ の 春 は
 鉄 砲 に 撃 た れ て 死 ん だ と ナ 死 ん だ と ナ

手まり歌の“うちの裏のちしゃの木”にある「雀の歌」が転用されているものと思われます。「死んだとナ」で縄をまたぎます。

6. 文福茶釜

文福茶釜の お茶沸かし
 お茶がわいたら 出ておいで
 お次おはいり 今日 じゃんけんほい

あいこでしょ 負けたお方はお逃げなさい
(千種町)

十はとうとう焼け野原
(加古川市)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編

ぶ んぶ く茶 がま の お茶わ かし
お 茶 がわ いた ら で てお いで
お つ ぎ お は い り
こ ん に ち は じゃ ん け ん ほ い
ま け た お か た は お に げ な さい

文福茶釜の お茶沸かし
お茶がわいたら 出て頂だい
(村岡町)

7. 一匹チュウ

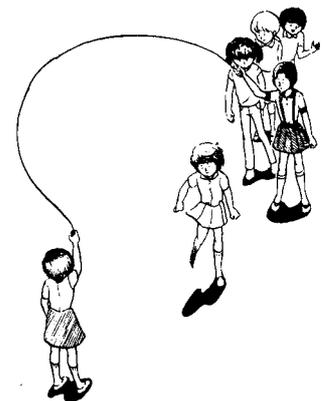
1匹チュウ そら 2匹チュウ そら
3匹チュウ ...
そら お出ました そら お入りだ ...
(八鹿町)

長縄をまわしているところに一人が入り、歌の
終わりまで跳んで次の子と変わる遊び歌です。途
中で足を引っ掛けたりすると縄持ちを交代します。

長縄を回しているときに跳んでいる人の人数を
調整するための文句です。

8. 一羽のからすが

一羽のからすが カアカア
二はにわとり コケコッコ~
三は魚が泳いでる 四は白髪のおじいさん
五はごほうびいただいて
六はロッパの はげあたま
七はかわいい 七五三 八は浜辺の白兔
九は黒ンボ インデアン



5 . 関所遊びの歌（2曲）



江戸時代から全国的に伝播したくぐり遊びの一種に関所遊びがあります。

その中でも“とうりゃんせ”は、大正時代に本居長世が編曲して、童謡として広め、歌詞もメロディも普遍のものとなっているようです。

明治時代のこの歌は、単調なメロディを繰り返すものであったといわれています。

1 . とうりゃんせ

とうりゃんせ とうりゃんせ
ここはどこ細道じゃ 天神様の細道じゃ
ちょっと通してくだしゃんせ
ご用のないもの通しゃせぬ
この子の七つのお祝いに
お札を納めにまいります
いきはよいよい 帰りは怖い かわいながらも
とうりゃんせ とうりゃんせ

（竜野市）

る子のお尻をたたいたりする遊びもあります。

この歌は、江戸幕府のころ、箱根関所の通行の厳しさを歌ったという説があります。当時、手形のないものは絶対通しませんでした。ただし、特殊な事情がある者は別で、例えば親の重病などの場合などに限って、関所に哀願して通してもらっていました。しかし、その帰りには絶対に手形がなければ通さなかったことを「かえりは怖い」と唄っているという説です。

また、他の説では、穀物の豊作を願って、人身御供を捧げた土着宗教の名残を唄っているといわれています。

歌の終わりに、「帰りのお土産なにもうた」や「こわい橋からお化けが出るよ」とも唄われます。

2 . 淀の川瀬の

淀の川瀬の 花水車 梅と桜とあわせてみたら
梅の眺めは ピンコ シャンコ シャン
ちょっと 米ついて ト～ントン

（赤穂市）

門になる子が2人向かい合って両手を合わせて、肩の高さ以上に上げ、その中を一列になって円陣をつくった子どもたちが、歌にあわせてくぐっていく遊びです。門の子は歌の終わりに手を下ろし、一人を捕まえます。

また、全員がくぐった後に門の子がくぐってい

手をつないでたて一列になり、最後の2人は向かい合って手を合わせて上にあげます。その下を先の者から順にくぐって行って「ト～ントン」で門の子が手を下ろします。そこでつかまった子が門の子と交代します。

淀川に三十石船が往来したころ、淀の廻船問屋「川瀬」に大水車があり、江戸の流行歌になったともいわれています。



6 . 子取り遊びの歌 (6 曲)



子取り遊びとは、広場などで、子どもたちが2組に分かれて向かい合って並び、互いに歌問答を一通りして、最後に指名された子どもが、向かいのグループに取られていく遊びです。

1 . 花いちもんめ

- A : 「勝ってうれしい 花いちもんめ」
B : 「負けて悔しい 花いちもんめ」
A : 「どの子が欲しい」
B : 「あの子が欲しい」
A : 「あの子じゃわからん、名を言っておくれ」
B : 「 ちゃんがほしい」
A : 「どうしていくの」
B : 「 でおいで」

(神 戸 市)

この歌の歴史は案外新しいといわれ、京都あたりを中心に全国に広がったのではないかと考えられています。

歌にあわせて一方が、三步前進して片足を上げ、相手を蹴る真似をします。もう一方の組は、この動作に合わせて三步後退します。この動作を繰り返し、指名された子が、歌の最後で「 でおいで」の のゼスチュアをしながら相手の仲間になって行きます。

指名された子が両組から出てジャンケンし、負けた子どもがもらわれていく場合もあります。

また、指名された子同士が、両組の境界として引いた線をはさんで引っ張り合いをし、引かれて線を出た子が負けになるというルールもあります

ふるさとまとめて 花いちもんめ
ふるさとまとめて 花いちもんめ
 ちゃんとりたや 花いちもんめ
××ちゃんとりたや 花いちもんめ
勝ってうれしい 花いちもんめ
負けて悔しい花いちもんめ

(高 砂 市)

持ってうれしや 花いちもんめ
どの子がほしい あの子が欲しい
あの子じゃわからん さんがほしい
この子はやらん
××さんがほしい この子はやろう
ジャンケンポン
勝ってうれしい 花いちもんめ
負けて悔しい花いちもんめ

(千 種 町)

子取り遊び歌として、今回情報が最も多かったのは“花いちもんめ”でした。子どもたちが集まって、2組に分かれてから遊びが始まるのですが、分かれ方としてジャンケンをして「勝ち組み」と「負け組み」に分かれる方法や、好きな子同士が集まって2組に分かれる方法などがあります。

2. お茶あがりんか

A : 「向かいのおばさんお茶あがりんか」
B : 「何茶でござんす」
A : 「芋茶でござんす」
B : 「芋茶いっぱい飲みたいけど、道に鬼が
おっつよう行きまへん」
A : 「そんならお迎え どなたが欲しい」
B : 「 ちゃんが欲しい」
A : 「連れていんで 何食わす」
B : 「鯛のととに赤まま」
A : 「赤ままに鯛のとと」
B : 「骨たたあ身から抜いてよ」
A : 「何でよ」
B : 「毛抜きで」
A : 「痛いわ」
B : 「痛ないように」
A : 「そんならお迎え頼みます」

(南 淡 町)

集団が2組に別れ、向かい合って2列に手をつないで並び、歌にあわせて一方が、手を振りながら前進します。もう一方の組は、手を降りながらこの動作に合わせて後退します。この動作を繰り返し、指名された子と迎えに行った子がそれぞれのグループに交代して入るといった遊びです。

3. 子買お子買お

鬼 : 「子買お子買お」
他 : 「何もんめで買いなさる」
鬼 : 「一もんめで買いましょう」
他 : 「そりゃ安い」
鬼 : 「二もんめで買いましょう」
他 : 「そりゃまだ安い」
鬼 : 「十もんめで買いましょう」
他 : 「そんなら売りましよう、どの子が欲しい
ざる」
鬼 : 「 さんが欲しいざる」
他 : 「もろうて何しやる」
鬼 : 「二階で手習い」
他 : 「あぶない」
鬼 : 「その下で手習い」

他 : 「手が汚れる」
鬼 : 「水で洗う」
他 : 「つめたい」
鬼 : 「いい加減でうめてやれ」
他 : 「そんなら売りましよう」

(伊 丹 市)

この遊びの起源は「雀の遊び」といい、平安期にさかのぼります。地蔵菩薩が賽の河原で、子どもを取りに来る鬼から子どもを守る様子を表現した遊びであるといわれています。

一人が鬼になり、他の子は縦に一列に並び、一番前の子が手を広げて、後ろの子をかばいます。鬼になった子がその子の前に立って歌問答を始めます。

歌問答が終われば、指名された子と鬼の子が交代するという遊びです。

鬼 : 「子買を子買を」
他 : 「子を買うてなんしょ」
鬼 : 「ととにまんま」
他 : 「ととに骨がある」

鬼：「むしって食わそ」
 他：「むしきりゃきたない」
 鬼：「洗ろうて食わそ」
 他：「洗えば水臭い」
 鬼：「しょう油かけて食わそ」
 他：「それもよかる どの子が欲しい」
 鬼：「　　ちゃんがほしい」
 他：「私は　　ちゃんの母親です」
 鬼：「　　ちゃんに合わせて下さい」
 他：「今、お便所へ行ってます」
 鬼：「もうでましたか」
 他：「今、お風呂へ入っています」
 鬼：「もう上がりましたか」
 他：「今、ご飯食べています」
 鬼：「何のおかずで」
 他：「蛇だの　とかげだの　かえるだの」
 鬼：「これー」

(加古川市)

鬼：「子買を子買を」
 他：「子をはなんで養う」
 鬼：「肴に飯」
 他：「魚には骨がある」
 鬼：「むしって食わそ」
 他：「むしったらいじましい」
 鬼：「洗ろうて食わそ」
 他：「洗えば水臭い」
 鬼：「しょう油かけて食わそ」
 他：「それもよかるが どの子が欲しい」

(高砂市)

4. 向かいのこせさん

A：「向かいのこせさん、子は何人ござる」
 B：「4, 5人ござる」
 A：「一人下さい、やしのて進上」
 B：「何食ってやしなう」
 A：「砂糖まんじゅう」
 B：「そりゃ虫の大毒」
 A：「赤い飯にととそえて」
 B：「そらなおよかる、どいつなととってい
 け」

(赤穂市)

長谷坂先生が収集されたこの歌の遊び方は、前述の“子買お”と同じです。

一人が鬼になり、他の子は縦に一列に並び、一番前の子が手を広げて、後ろの子をかばいます。鬼になった子がその子の前に立って歌問答を始めます。歌問答が終われば、指名された子と鬼の子が交代するという遊びです。

5. どどんどの子がほしい

A：「どどんどんどん どの子が欲しい」
 B：「　　ちゃんと　　いう子が欲しい」
 A：「行ったら　何々食わす」
 B：「あずき飯に　ととそえて」
 A：「お馬に乗って　おいでなされ」
 B：「お馬の足が　折れました」
 A：「お駕籠に乗って　おいでなされ」
 B：「お駕籠の底が　ぬけました」
 A：「弁当かついで　エッサッサ　エッサッ
 サ」

(氷上町)

一人が鬼になり、他の子は数人向かい合って横
一列に並び、歌問答の後指名された子がもらわれ
ていきます。

昔は草履を履いて、“けんけん”で前へ出たり
うしろへひっこんだりしながら、鬼が名を呼んで
くれたらと願いつつ遊んだそうです。

6. タンス長持ち

A：「タンス長持ち どの子が欲しい」

B：「あの子が欲しい」

A：「あの子じゃわからん」

B：「この子が欲しい」

A：「この子じゃわからん」

B：「　　さんが欲しい」

A：「どうしていくの」

B：「　　でおいで」

A：「勝ってうれしい 花いちもんめ」

B：「負けて悔しい 花いちもんめ」

(尼崎市)

タンス長持ちどの子が欲しい
あの子が欲しい あの子じゃわからん
　　ちゃんが欲しい 何もってごじゃろ
タンス持ってごじゃれ

(相生市)

タンス長持ちどの子が欲しい
あの子が欲しい あの子じゃわからん
相談しましょ そうしましょ
ジャンケンホイ！
勝ってうれしい花いちもんめ
負けてくやしい 花いちもんめ

(西脇市)



7. 人当て鬼の歌（7曲）



人当て鬼は、鬼が後ろにいる人を当てるという「当てもの遊び」の一種でもあります。

鬼になった子は、目隠しをしてしゃがみこみます。他の子は鬼を中心に、歌を唄いながら周りに円陣をつくってグルグルまわります。歌の最後に鬼は真後ろにいる子どもが誰かをあてます。当てられた子が、鬼を交代するという遊びで、古く江戸時代から遊ばれていたようです。

1. かごめかごめ

かごめ かごめ
かごのなかの とりは いくつか でやる
夜明けの晩に 鶴とカメがすべった
後ろの正面だ～れ
(安富町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

かごめかごめかごのなかの
とりは いくつかでやる
よあけのばんにつるとかめが
すべったうしろのしゅめんだあれ

情報の中で、最も多かったのが「かごめかごめ」でした。この歌はまさに、「わらべ歌」を代表する歌といえるでしょう。

江戸時代の後期にまとめられた「童謡集」の中には、「かごめかごめ かごのなかの鳥は いくつかでやる 夜明けのばんに つるつるつべった なべのなべの そこぬけ そこぬいてたもれ」という歌詞が載っています。

「かごめ」という言葉は、もともと「身をかごめよ」という意味であったといえます。「つるつるつべった」も長い年月の間に「鶴とカメがすべった」というふうになったと考えられています。

..... 後ろ正面だ れ
ひとんこ ふたんこ さんべらこ
寄ってたかって ひとつかみ
どの人さんが 残った
(温泉町)
..... 夜明けの晩に 目と目があって
(加西市)

2. ご～じゃごじゃ

他：ご～じゃ ごじゃ 誰の隣に誰がおる
鬼：「さんのとなりに ××さんや」
(間違っていたら)
他：「そらおおけに おおまちがい」
(あっていたら)
鬼：「そらおおけに ごくろうさん」
(加古川市)

加古川市内の地域よりいくつか寄せられました。遊び方の記載は、残念ながらありませんでしたが、歌詞より「かごめ」の他バージョンではないかと推測できます。

3. 角さん角さん

他：角さん 角さん どこ行きしゃんす
鬼：わあしは 波の 山へ
他：「なら 一本 おくれんさえな」
鬼：「やるのはやるけど 落とすなよ」
他：落しました落しました
尻からすとんと抜けました

(養父郡)

遊び方は、「かごめ」とよく似ています。歌の最後に鬼が輪の中の一人を捕まえてその人の名をあてます。

4. ぼうさんぼうさん

ぼうさん ぼうさん どこ行きゃ
今から山へ柴刈りに
わたしもいっしょに連れてって
お前が行ったら じゃまになる
ケンケン坊主 ケン坊主 後ろの正面だ~れ
(吉川町)

ぼうさんぼうさんどこ行きゾ
わたしは田圃に稲刈りに
わたしもいっしょに連れてって
おまん来たら じゃまになる
かんかん坊主のかん坊主
後ろの正面だ~れ
(あたらたら)
あ~たりました あたりました ばた餅進上
(南淡町)

5. 中の中の小坊さん

なかのなかの 小ぼんさん なんで背が低いの
伊勢のえび食べて そいで背が低いの
もういっぺん まいまいしょう まいまいしょう
あたまの皿はいつ皿 む皿 なな皿 や皿
ここの皿 と皿
とうおめに べったんとん
夜も昼も あま食べて
べったん べったん べったんとん
(加古川市)

この歌も古くから全国で唄われています。最初の部分のメロディが「通りゃんせ」と同じになっています。

遊び方は「かごめ」のそれと全く同じです。

ぼんさんぼんさんどこ行くの
わたしは田圃へ稲刈りに
わたしもいっしょに連れしゃんせ
お前が行ったら じゃまになる
このかんかん坊主 くそ坊主
後ろの正面だ~れ
(高砂市)

ぼうさんぼうさんどこへ行く
あの山越えて酢買いに
わたしも連れて行きしゃんせ
お前が行ったが じゃまになる
かんかん坊主 くそ坊主 後ろの正面だ~れ
(加西市)

出典 めんめろの生きた道
採譜 山本 嶺一

な かの な かの こ ぼん さん
な ん で せ が ひ く い の
い せ の え び た べ て
そ い で せ が ひ く い の
も う い っ ぺ ん ま い ま い し ょ う
ま い ま い し ょ う
あ た ま の さ ら は
い な さ さ ら む さ ら
な さ ら や さ ら
こ こ の さ ら と さ ら
と う お め に べ っ た ん と ん
よ る も ひ る も あ ま た べ て
べ っ た ん べ っ た ん べ っ た ん と

この遊びは平安時代以来の「背比べ遊び」に起源を發するといわれています。

江戸時代前期から西日本を中心に、全国に伝播したと考えられています。

歌詞に「立って見よ、座って見よ」とある地方は、京都から、「頭の皿は幾皿、六皿、七皿…」とある地方は大阪からの伝播であるとみられます。したがって、上記の歌は後者のものであると考えられます。

目隠しをしている鬼を真ん中に、他のみんなが歌を唄いながら周囲をまわりますが、「頭の皿は…」からは真ん中でしゃがんでいる子の頭をなでてまわります。最後に頭をなでた子が鬼を交代すると上掲の「めんめらの生きた道」にありました。各地より様々な歌詞が収集できました。

…………… そいで背が低い 立ってみよ
座ってみよ 後ろの正面だ～れ
(加古川市)

…………… そいで背が低い 親のゼニ盗んで
鯛買うて食ろて のどに骨立てて
そいで背が低い 後ろの正面だ～れ
(加古川市)

…………… 親のゼニ盗んで
鯛買うて食ろて のどに骨立てて
キッ～ キッ～と泣いたがな
(稲美町)

…………… 親の日に魚食て そいで背が低い
立ってみよ 座ってみよ
後ろにいるものだ～れ
違うた違うた 二、三日ちごた
京の京の大仙さんが 焼いてな
立ってみよ 座ってみよ
後ろにいるものだ～れ
(篠山市)

6. お梅なにしゃる

お梅 なにしゃる 行灯の陰でよ
かわい殿御さんの 帯くけるエ～
ありゃ どんどんどん こりゃ どんどんどん
もういっぺん まいましょう まいましょう
しはだ～れ

「しはだ～れ」とは「鬼はだ～れ」という意味です。

7. あわぶくたった にえたった

あわぶくたった 煮え立った
煮えたかどうか 食べてみな
隣のオバサン 今何時
3時のおやつは なあに
後ろの正面だ～れ

あわぶくたった 煮え立った
煮えたかどうか 食べてみよ
ムシャ ムシャ ムシャ
まだ煮えない まだ煮えない まだ煮えない
もう煮えた 後ろの正面だ～れ

8 . 鬼きめ、かくれんぼ、他広場での遊びの歌 (17曲)



鬼きめとは、何か遊びを始める時、順番や鬼を決める時の歌。かくれんぼは、まず、鬼に決まった子が目隠しして数をよむ間に他の子がどこかに隠れます。次に、数をよみ終わった鬼の子が、隠れた子を探しに行き、全員を見つけたら鬼を交代するという、現在でも盛んに行われている遊びです。

1 . いわこわ (鬼決め歌)

いわこわ いわのまつ
一本伐って のきよかいな
ブンブン山のほら貝 ブンブン

(千種町)

鬼ごっこなどをする時、こういって鬼の選定をします。

2 . おねでんでんぼ (鬼決め歌)

おねでんでんぼの お葱の玉の
おいのおいのおい 鬼になっても おこりなえ
おこるようなら 寄らんがええ 寄らんがええ
(加古川市)

3 . むかいのさむらい (鬼決め歌)

むかいのさむらい つきのけた
(加東郡)

4 . 屁勘定 (鬼決め歌)

屁勘定 屁勘定 今の屁は たりゃこいた
親にかくして 子がこいた
(津名町)

唄いながら先を折った小枝を手のひらで回し、歌の終わりに当たったものが鬼になるという鬼きめ歌です。

5 . 多いもんがっち (鬼決め歌)

おおいもんがっちでほい
(加古川市)

人数が多いときに、はじめに出した拳の多いものが勝ちとする鬼きめ歌です。

6 . かくれんぼするもん (かくれんぼ)

かくれんぼするもん この指たかれ
(温泉町)

奈良県では、この後「山崩せ、ジャンケンポン、梅か桜かギッチョンチョンでチョン 長谷の牡丹は よい牡丹 お耳を回してスッチョチョンのチョン もひとつ回して スッチョチョンのチョン」という歌詞がつかます。

兵庫県にも「梅と桜と あわせてみれば 梅の

流れにピンコシャンのシャン」といって二グループに分かれる歌があります。

遊びによって「鬼ごっこ」や「縄跳び」などと変えて唄われることもあります。

かくれんぼするものよっといで
も～いいかい ま～だだよ

(豊岡市)

かくれんぼするもんよっといで
じゃんけんぼんよ あいこでしょ

(篠山市)

とりこするもん寄ってこい
かくれんぼするもの この指にぎれ

(加古川市)

押し合いゴンボ 押しゴンボ
千な万なと寄って来い

(この歌は、押しくらまんじゅうにさそう歌と
考えられます)

(加古川市)

7. 黒船来る(おにごっこ)

そうら えらいこっちゃ えらいこっちゃ
毎年 渡海の ごちそうに
大筒 小筒で 払おうぜ 払おうぜ

(五色町)

かくれんぼをする前に、ジャンケンをして鬼を決めるときに唄います。

「えらいこっちゃ」でジャンケンをして鬼が決まります。このあとすぐに鬼は目隠しをして数を大きい声でよみます。「払おうぜ払おうぜ」で他の皆はあちらこちらに隠れます。

8. てんつるてんつる(おにごっこ)

てんつる てんつる そんなしゃくしで
天がつらりょうか

(三原町)

三原町市村は淡路人形の発祥地といわれます。この歌を採集された浜岡きみこ先生は、「三原町の子どもは小さい頃から三味線の音を聞き慣れ、練習をします。三味線は『てんつるてんつる』という音がします。天を吊るといっても(三味線の形を杓子に例えて)そんな物で天がつれるか、天は高くて吊ることができるか、と囃したたて遊んだのです。」と語ってくれました。

最後の「つらりょうか」で皆が散って逃げます。

9. 草履かくし(ぞうりかくし)

草履かくし じょうれんぼ
橋の下のねずみが 草履をくわえて
チュッチュクチュ
チュッチュクチュまんじゅは
誰が食た 誰も食わない わしが食た
表の看板 三味線屋
裏からまわって 三軒目 チュッチュクチュ

(竜野市)

めいめいの履物を片方だけぬいでずらりと一列に並べ、唄いながら順々に指差していきます。歌

の終わりに当たったものを除けて、最後に残った履物の持ち主が鬼となります。鬼が目をふさいでいる間に自分の脱いだ履物をかくします。いわゆる草履のかくれんぼです。

さてば～とからかくす ひそかにかくせ～
鬼の知らぬ間に オイチニのドンデンドン
(稲美町)

じょうりかくし じゅうれんぼう
橋の下のネズミが じょうりくわえて
チュッチュクチュ
チュッチュクまんじゅう 誰が食た
誰も食わへん わしが食た
(西脇市)

(西脇市での遊びは並べた草履をケンケンで
隠し、ケンケンでさがします)
じょりかくしに な～らんぼに
つ～ちゃ ごぼずや またみぬ
なんない 言葉もしれん なんないち～
(家島町)

じょうりかくし 九年母 ちゅうちゅうや
かぶらや菜種の花が 咲いたりすぼんだり
じょうじょうぐるまに まってんとう見れば
さむらいげつと 井戸のはたに茶碗置いて
おお危なやの はよのけらんせ
(加古川市)

10. 羅漢さん(ものまねあそび)

羅漢さんがそろたら 回わそじゃないか
よいやさの よいやさ
(加古川市)

円陣をつくり、各自のしぐさを決めて、「よいやさ」の掛け声にあわせて、始めは自分のしぐさ、次から右隣の子の真似をしていき、掛け声を早くしていき、仕損じたら輪から抜けていくという遊びです。

らっかさんがそろたら まわそじゃないか
よいやさ～ よいやさ～
よいやさ～ よいやさ～
(但東町)

11. 今日の天気(ものまねあそび)

今日の天気はいい天気
お庭のぼたんはよう咲いた
お鼻にかざして スッポンポン
もひとつかざして スッポンポン

今日の天気はいい天気
野原のタンポポよう咲いた
お耳にくるめて スッポンポン
もひとつくるめて スッポンポン

今日の天気はいい天気
たんぼのれんげはよう咲いた
頭にかざって スッポンポン
もひとつかざして スッポンポン
(加古川市)

江戸時代から京都地方を中心に唄われた歌といわれています。リーダーを中心として他の子が周囲を輪になって囲み、歌を唄いながらするリーダーの動作を他の子が真似する遊びです。例えば、「お鼻にかざして」で花を鼻先に持って行って香りをかく動作をしたり「お耳にくるんで」で耳たぶのまわりを手でくるくるまわす動作をしたりします。

れんげを摘もか たんぽぼ摘もか
今年のれんげはよう咲いた
耳に巻いて スッポンポン
もひとつ巻いて スッポンポン
(神戸市)

れんげを摘もか 花摘もか
ことしのれんげはよう咲いた
お耳をまわして スッチョンチョン
もひとつまわして スッチョンチョン
もう帰ろう 送ってあげよう
あなたの姿は 蛇姿

(篠山市)

こけら つっぱりせえ つっぱりすら痛い
痛けら 往んどれ

(加古川市)

12. おしくらまんじゅう(おしあいあそび)

おしくらまんじゅう おされてなくな

(豊岡市)

14. 一、二の三(足遊び歌)

一二の三 四の二の五

三一四の二の 四の二の五

(太子町)

寒い日によくやる押し合い遊びの歌。一人の子を中心に、他の子が周囲に集まり、押し合う遊び方が一般的です。押されてはみ出したり、倒れたりした子は端に移動して、もう一度押し合いに加わります。

おせおせ どんぼ できたもの たぬき

(但東町)

13. せれせれごんぼ(おしあいあそび)

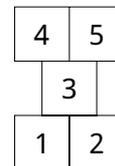
せれせれ ごんぼ 竹の皮にしめ

せれせれ ごんぼ 竹の皮にしめ

(西淡町)

地面に図のような形と数字を書き、歌にあわせて片足で跳ぶ遊びです。

ルールは様々で、特定の数字の時には両足で飛べたり、休憩できたりする枠があったりもします。線を踏んだり、間違えると負けになり、次の子と交代します。



15. いか凧あがれ(たこあげの歌)

いかたこあがれ てんまであがれ

あたごさん 権現さん

なぜおくれ あまったら かやしまっしょ

(千種町)

遊び方は、「おしくらまんじゅう」と同じです。この歌は、伝承者の古老が大正時代に歌ったものといわれています。

せりせりごんぼ せられてほえな

(稲美町)

おっしゃいごんぼ できたもんでんぼ

(加古川市)

かあかあからす こ〜めんじょ

米がなけりや 田アすけ

田アすきや よごれる よごれりや洗え

洗いや 冷たい 冷たけら あぶれ

あぶら熱い 熱けら 後よれ 後よら こける

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編



凧あげをする時のとなえ歌です。

16. でんでらこぼす (雪すべりの歌)

でんでらこぼす またこぼす
折れたら持って来い 継いだるぞ
(温泉町)

雪が多い但馬地方での遊びです。前の日に30cm
くらいの雪の小山をつくっておき、凍らして次の
日に片足ですべる遊びです。

この歌を唄いながら一列になって順々に滑りま
す。

17. ひらいたひらいた (輪遊びの歌)

ひらいた ひらいた 何の花がひらいた
れんげの花がひらいた
ひらいたと思ったら いつのまにか すぼんだ
すぼんだ すぼんだ 何の花がすぼんだ
れんげの花がすぼんだ
すぼんだと思ったら いつのまにか ひらいた
(姫路市)

江戸時代からの遊びで、もともと関東地方の遊
びでしたが、幼年唱歌集などに掲載されたことか
ら全国に普及しました。明治初期が最も盛んに遊
ばれていたといわれています。

子どもたちが輪になって手をつなぎ、「ひらい
たひらいた」で輪を大きくしてまわり、「すぼん

だすぼんだ」では真ん中によって花のつぼみをあ
らわします。

加古川市からは、「れんげ」の花の代わりに「た
んぽぽ」「菜の花」「チューリップ」など様々な花
の名を入れて遊んだ思い出を頂きました。



9. 手合わせ遊び、じゃんけん遊びの歌 (24曲)



始めに「せっせっせ」と拍子をとって遊ぶ手合わせ遊びは、今も全国各地で遊ばれています。二人もしくは数人が向かい合って、相手の手と歌に合わせて打ち合わせる遊びです。歌の途中で、簡単な手振りや身振りが加わるものもあります。

1. 茶摘み (手合わせ歌)

せっせっせ の よいよいよい
夏も近づく 八十八夜 (トントン)
野にも山にも若葉が茂る
あれに見えるは 茶摘じゃないか (トントン)
あかね禪に すげの笠

(和田山町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治



手合わせ遊びで誰もが思いつく歌は、「夏も近づく」から始まる小学校唱歌“茶摘み”ではないでしょうか。二人で向かい合ってお互いに手を交差しながらたたいたり、手拍子をしたりしながら唄います。

2. ひとつひよこが (手合わせ歌)

せっせっせ
一つ ひよこが豆を食て たいやくねんねん

二つ 舟には船頭さんが たいやくねんねん
三つ 店屋に番頭さんが たいやくねんねん
四つ 横浜異人さんが たいやくねんねん
五つ 医者さんが薬箱 たいやくねんねん
六つ 昔はちょんまげ結うて
七つ 泣き虫ひねりもち たいやくねんねん
八つ 山伏ほらの貝 たいやくねんねん
九つ 乞食がおわん持って たいやくねんねん
十 殿さんお馬に乗って たいやくねんねん

たいやくねんねん

(小野市)

出典 ふるさとのうた第1集
小野市観光協会編



「一つひよこが」から始まる手合わせ歌は、県下各地はもちろん全国的なもので、はじめに「せっせっせ」をつける地域とつけない地域とがあります。

歌詞も様々で、特にお雛子ことばの「たいやくねんねん」のところは、今回寄せられたものでも多数ありました。

一つ ひよこが豆を食て たいろくないない
二つ 舟には船頭さんが たいろくないない
三つ 店屋の番頭さんが たいろくないない
四つ 横浜異人さんが たいろくないない
五つ 医者さんには薬箱 たいろくないない
六つ 昔によるい着て たいろくないない
七つ 泣き虫ひねりもち たいろくないない

盆のおっ月さん まるい
 誰にもろたか 源次郎さんにもろたわね
 源次郎男は 派手者で
 三味線じゃ 三味線じゃ

(津名町)

『浮世床』に越後の警女歌(ごぜうた)として
 見られる名歌です。

二人向かい合って、歌は二拍子、手は三拍子で
 遊びます。

「せっせっせ」で相手と両手をあわせ、右手は
 甲を左手は手のひらを上にして互いに打ち合いま
 す。途中で手拍子が入ります。



せっせっせ むこどりやまの鶯一羽ネ
 一に水仙 二にかきつばたネ 三にや下がり藤
 四にや獅子牡丹ネ 五つ伊山の千本桜ネ
 六つ紫色よく染めてネ 七つ南天
 八つやの娘ネ 九つ小梅がちらりとぱらぱら
 十で殿様 御城の御門ネ
 御門所が あぶら買いに行たらネ
 いたら異人が ペケボンとへべすネ
 奥州 甲州 播磨の姐さん
 西瓜つるして かぼちゃが真似して
 すっぺら ほい

(千種町)

5. 一に橘(手合わせ歌)

せっせっせ からりとせ
 一に橘 二にかきつばたネ 三に下がり藤
 四に獅子牡丹ネ 五つ伊山の千本桜ネ
 六つ紫 七つ南天 八つ山吹
 九つ紺屋が色よく染めてネ
 十で殿様 葵の御紋ネ

(加古川市)

出典 ふる里のうた
千種町文化協会編

セッセセむ こど りやまの うぐいす いちおネ
 いちに すいせん にやかき つばたネ
 さんに さがりふじ しにやしし ぼたんネ

6. おんごく(手合わせ歌)

向こうの向こうの 万みよさん(万右衛門)
 藁一把あげよか わしゃ医者いらん

病ならこそ医者いります
 ほんなら二把あげよか わしゃ庭はかん
 丁稚ならこそ庭はきます
 ほんなら三把あげよか わしゃ三味ひかん
 芸者ならこそ三味ひきます
 ほんなら四把あげよか わしゃしわよらん
 婆さんならこそしわよります
 ほんなら五把あげよか わしゃ暮うたん
 旦那さんならこそ暮うちます
 ほんなら六把あげよか わしゃ牢いらん
 盗人ならこそ牢いります
 ほんなら七把あげよか わしゃ質おかん
 貧乏ならこそ質おきます
 ほんなら八把あげよか わしゃ鉢めがん
 あわてならこそ鉢めぎます
 ほんなら九把あげよか わしゃ鍬もたん
 百姓ならこそ鍬もちます
 ほんなら十把あげよか わしゃ重もたん
 彼岸ならこそ重箱持ちます

(加古川市)

大阪の代表的なわらべ歌であるといわれています。江戸時代から明治30年ころまで続いた夏の遊戯歌で、十数名の女の子が花笠をかぶった幼児を先頭になり子守りや母親が付き添って、この歌を唄いながら市中を練り歩いたといわれています。

今回は、加古川市から手合わせあそびの歌としてお寄せいただきました。

7. おはぎの嫁入り(手合わせ歌)

おはぎがお嫁に行くときにや
 あんこときなこでお化粧して
 まあるいお盆にのせられて
 遠いところへお嫁入り

(津名郡一宮町)

曲はアメリカ民謡の“グロリーハレルヤ”です。

様々な歌詞があります。

ごんべさんのあかちゃんが風邪引いた × 3回

そこであわててシップした
 (豊岡市)

おたまじゃくしはかえるの子
 なまずの孫ではないわいな
 それの何より証拠には
 やがて手が出る 足がでる
 (神戸市)

いつもはだかのキューピーさん
 お金がないのにバス乗って
 バスの車掌におこられて
 これは失礼ごめんなさい
 (浜坂町)

おはぎがお嫁に行くときは
 砂糖ときなこでお化粧して
 お椀のお船に乗せられて
 口の白歯につきました
 奥歯の茶店で腰掛けて 喉の細道通り抜け
 お腹のお宿をお借りして 明日は下りか下関
 (城崎町)

8. 芋屋のおじさん(手合わせ歌)

芋屋のおじさん 芋切って
 たたいて つめくって 真っ黒け
 (大屋町)



9. ずいずいずっころばし(指遊び歌)

ずいずいずっころばし 胡麻味噌ずい
 茶壺に追われて トッピンシャン
 抜けた～ら ドンドコショ
 俵の鼠が 米食ってチュウ
 チュウ チュウ チュウ
 おっ父さんが呼んでも おっ母さんが呼んでも
 行きっこな～しよ
 井戸の周りでお茶碗欠いたのだ～れ

(豊岡市)

番で強くつねります。そのとき「蜂ブンブン」といって蜂のように両手で飛ぶまねをします。楽譜は加古川市のものです。

11. 子と子と（指遊び歌）

子と子とけんかして 小指
親親おこって 親指
人様に御迷惑
なかなかスマンとおっしゃって 中指
紅屋の前ですみました 紅指

（播磨町）

“通りゃんせ”や“かごめかごめ”と同じくわらべ歌を代表するうたでありましょう。歌詞の意味は不明ですが、教科書にも載るほどの普及を見せえています。もともと東京地方の子ども歌として、明治前期より親しまれ、ラジオなどで放送されるうちに全国的に伝播したといわれています。

一人の子が、円陣になった他の子どもたちの突き出したにぎりこぶしを指差していき、歌の終わりにさされたこぶしの子が当たりという遊びです。

10. 一が刺した（指遊び歌）

一が刺した 二が刺した 三が刺した
四が刺した 五が刺した 六が刺した
七が刺した 蜂が刺した ブーン

（伊丹市）

県下全域で歌われている指遊びの歌です。歌にあわせて手の甲を順につまんでいき、8（蜂）の

この歌も、県下全域で歌われている指遊びの歌です。両手を合わせたり、指と指とを合わせて唄いながら遊びます。楽譜は西淡町慶野のものです。

12. いたずら坊主（手遊び歌）

お寺の中から お化けがにゅー
お化けの中から おけらさんがおけおけ
おけらさんの後から
おまわりさんがえへんぶい
おまわりさんの後ろから いたずら坊主が
ねんねして だっこして おんぶして 風車

（津名郡一宮町）

二人が向かい合って遊びます。「おばけがにゅー」で両手をぶらぶらし、「おけおけ」で両手を差し出してたたきあいます。「えへんぶい」では、鼻の下のひげをなでる真似をし、最後に手をたたきあいながらまわります。

13. ギッタンバタン (手つなぎ遊び)

ギッタン バタン 米屋の子
裸でとびこむ 風呂屋の子
そこらの子は はなたれ子

(播磨町)

相手の子と向かい合ってすわり、歌に合わせてリズムを取りながら、両手をつないで互いに引っ張り合って遊びます。

14. いっさんいっさん (手つなぎ遊び)

いっさん いっさん 髪結うておくれ
油もつとい 櫛こうがい

(但東町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

いっ さん いっ さん か みゆー て お くれ
あ ぶ ら もつ とい く し こ ー がい

15. なべなべ底抜け (手つなぎ遊び)

なべ なべ 底抜け
底が抜けたら かえりましょ

(浜坂町)

出典 但馬のわらべうた
採譜 長谷坂 栄 治

な べ な べ そ こ ぬ け そ こ が ぬ け た ら か え り ま し ょ

二人が手をつなぎ、歌を唄いながら両手を左右に振り、「かえりましょ」で手をつないだまぐるりと背中あわせになります。そのまま今度は元に戻る江戸時代から遊ばれていた遊びです。

16. うらおもて (組み分け遊び歌)

う~ら~お~も~て てってのて

(神戸市)

2組に分かれる遊びです。歌に合わせて、手の甲と手のひらのどちらかを見せ、甲の組と手のひらの組に分かれます。

17. いしかみはさみ (じゃんけんの歌)

せっせっせ ぱらりとせ
いし かみ はさみ
かみなりせんこで ぼたもち ホイ

(東浦町)

18. じゃんけんほい (じゃんけんの歌)

じゃんけんほい ほいほでほい しゅうけん
あいこでしょ しょっしょでしょ

(千種町)

19. じゃんけんでほい (じゃんけんの歌)

じゃいけんでーほい あいこでしょ

(神戸市)

20. 始めはグー (じゃんけんの歌)

始めはぐー じゃんけんほい

(芦屋市)

21. じゃんけんほい (じゃんけんの歌)

にいしゃほい あいこでほい (男子)
しゅうけんで にっしんで (女子)

(加古川市)

22. おちゃらか(じゃんけんの歌)

せっせっせい の よいよいよい
おちゃらか おちゃらか おちゃらか ほい
おちゃらか 勝ったよ おちゃらかほい
おちゃらか 負けたよ おちゃらかほい

(西脇市)

23. お寺の和尚さんが(じゃんけんの歌)

せっせー の よいよいよい
お寺の和尚さんが かぼちゃの種をまきました
芽が出て膨らんで 花が咲いたら
ジャンケンホイ

(加西市)

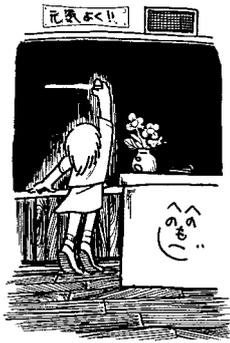
24. じゃんけんじゃばすけ(じゃんけんの歌)

じゃんけん じゃばすけ
アイスクリンでアメリカ
ヨーロッパくりげた
ひよりげたばこはまっくろけ

(神戸市)



10. 絵かき歌 (13曲)



絵かき歌は、歌どおりに線を引いていくと絵が出来上がるといふものです。

今回は13曲を収集することができました。

1. 蛸入道

みみずが三匹 おりました
朝めし 昼めし 晩のめし
雨がザーザー 降ってきて
あられがポツポツ 降ってきて
あっと言うまに 蛸入道

(美 方 町)

みみずが三匹 這い出して
朝めし 昼めし 晩のめし
雨がザアザア 降ってきて
あられもポツポツ 降ってきた
あっと言うまに 蛸入道

(津 名 町)

みみずが三匹 泳いでた
朝めしくって 昼めしくって 晩めしくって
雨がジャージャー 降ってきて
あられもポツポツ 降ってきて
あっと言うまに 蛸入道

(養 父 町)

みみずが三匹 寄ってきて
朝めし 昼めし 晩のめし
雨がザーザー 降ってきて
あられがパラパラ 降ってきて
あっと言うまに 蛸入道

(関 宮 町)



2. くーちゃん しーちゃん

くーちゃん しーちゃん てっぴーちゃん
おしゃれな おしゃれな みみこさん
平気で 平気で のんきで のんきで
試験はれーてん くーくーくーちゃん
ぺけぺけ まるまる まるかいてチョン
まるかいてチョン
さんかくじょうぎに きずつけて
だいこん にほんで じゅうえん
だいこん にほんで じゅうえん

(尼 崎 市)

大山さんに小山さん

雨がザーザー降ってきて

雨がザーザー降ってきて

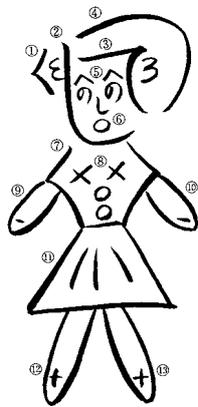
1円もろて 飴もろて 1円もろて 飴もろて

1円もろて 飴もろて

あっという間に お姫さま

(日高町)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治



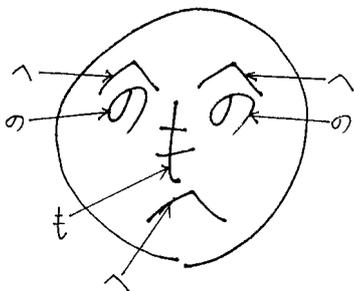
くーちゃんしーちゃん

3. へのへのもへじ

へのへのもへじ

(浜坂町)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治



4. たてたてよこよこ

たてたて よこよこ まるかいて ちょん
 まるかいて ちょん

たてたて よこよこ まるかいて ちょん
 大山 小山
 雨がジャージャー降ってきて
 あられがポツポツおちてきて
 一円もろて まんじゅうこうて
 いがんだ針が れいせんで
 あっというまに お姫さま

(篠山市)

よこよこ たてよて まるかいて
 ちょん まるかいて ちょん
 おおきなおまるに
 毛が三本 毛が三本 毛が三本
 ぐるっとまわって お嫁さん

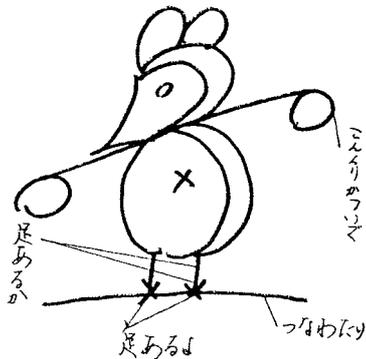
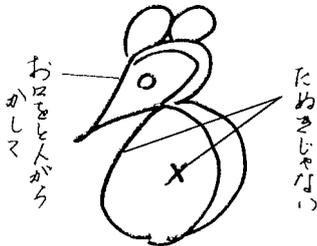
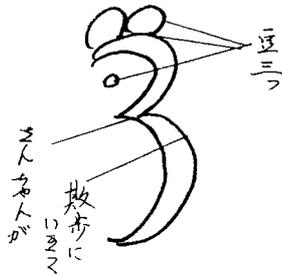
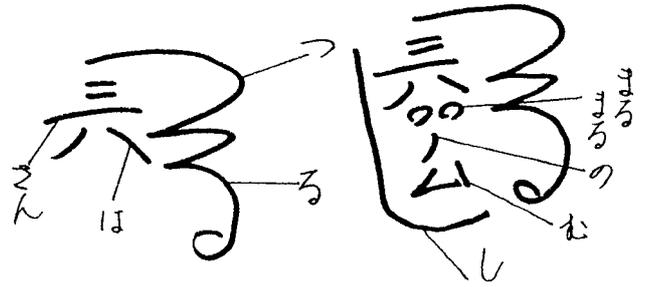
(津名町)

5. さんちゃんがさんぽにいきて

さんちゃんが 散歩にいきて まめみっつ
お口とんがらかして
たぬきじゃないよ 足あるか 足あるよ
こんくりかっいでつなわたり

(浜坂町)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治



6. つるさんは 虫

つるさんはまるまるむし

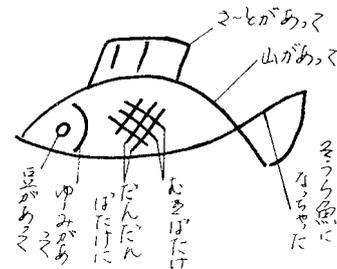
(豊岡市)

7. 山があって 里があって

山があって 里があって 段々畑に 麦畑
まめがあって ゆみがあって
そーら さかなになっちゃった

(豊岡市)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治

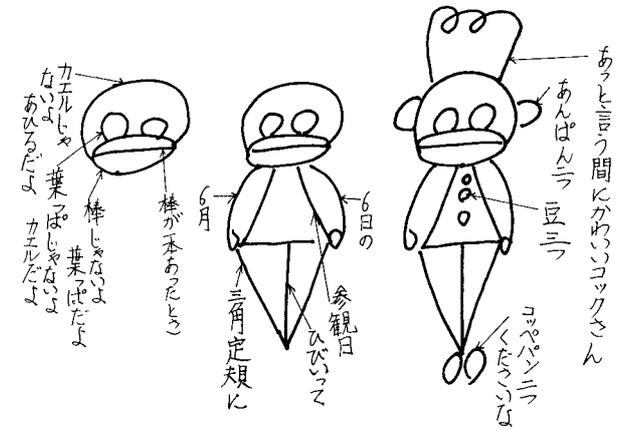


8. 棒が一本あったとき

棒が一本あったとき
はっぱかな はっぱじゃないよ かえるだよ
かえるじゃないよ あひるだよ
六月六日の参観日
三角定規にひびいて
コッパンふたつ くださいな
アンパンふたつ 豆みっつ
あっという間に かわいいコックさん

(和田山町)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治

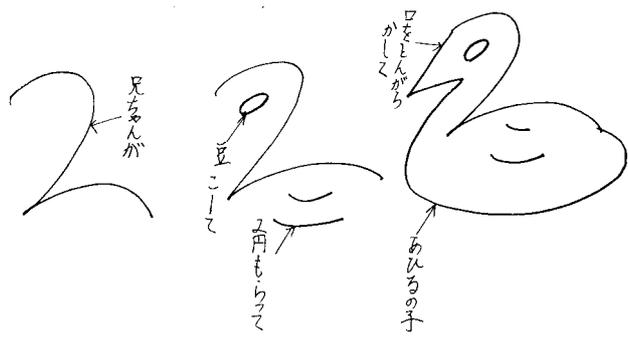


9. にいちゃんが

にいちゃんが 2円もらって 豆買って
口をとんがらかして アヒルの子

(関宮町)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治

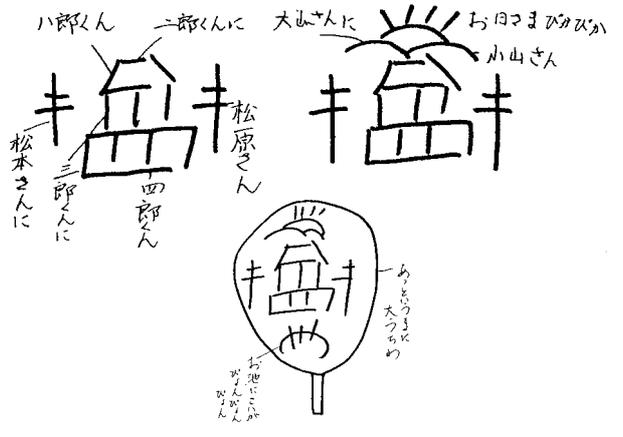


10. 二郎君に三郎君

二郎君に三郎君 三郎君に四郎君
松本さんに松原さん 大山さんに小山さん
お日さまぴかぴか お池にこいがぴよんぴよん
あつという間に 大うちわ

(養父町)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治

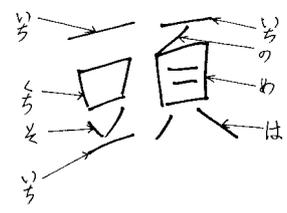


11. いちくちそいち

いちくちそいち いちのめは

(村岡町)

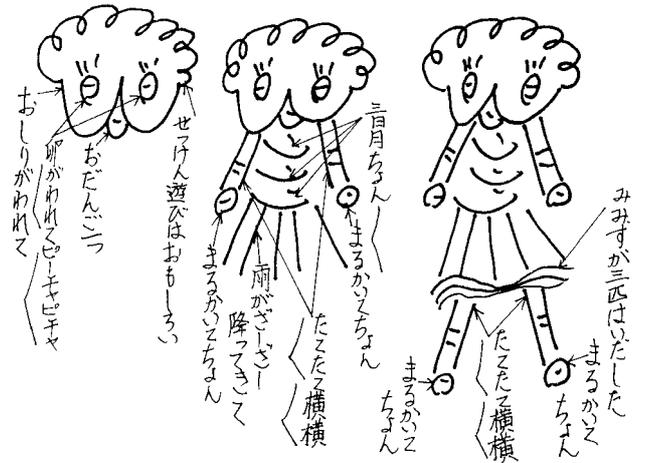
出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治



12. うんちゃんがー円もらって

うんちゃんが ー円もらって 豆こうて
算数三点 国語三点
平気で 平気で のんきで のんきで
試験は れ~てん
たてたて よこよこ まるかいて ちゃん
(温泉町)

出典 但馬のわらべ歌
採譜 長谷坂 栄 治



13. おしりがわれて

おしりがわれて おだんご1つ
卵がわれて ぴーちゃぴちゃ
せっけん遊びはおもしろい
三日月ちゃん 三日月ちゃん
たてたて よこよこ まるかいて ちゃん
雨がザ~ザ~降ってきて
みみずが三匹はえだした
たてたて よこよこ まるかいて ちゃん
(美方町)

兵庫県のわらべ歌

はじめに

今、町中に音があふれています。たくさんの入り乱れた音が、私たちの意思に関係なく勝手に耳に入ってきてしまいます。

こんなにうるさい音に囲まれても、一向に平気でいられることは、とても不幸なことなこともかもしれません。

昔なら、木を鳴らす風の音、地面をたたく雨の音、遠くの川のせせらぎに、じっと耳をすませ、色々な思いを馳せたことでしょう。

きっと、私たちの先輩は、くらしの中のそんな音をとても大切にしていたのだと思います。

最近の子どもたちは、生まれたときから音の洪水の中で育ちます。そういう子どもたちは、音を「聞き流す」くせがついているのだそうです。

大切な音も、そうでない音もいっしょに聞き流してしまう。音に鈍感になってしまう子どもたち。こんな悲しいことはないと思います。

私たちが子どもの頃、まだ仲間と一緒に遊ぶときに、いろんな歌を唄っていました。時代が流れて、いつのまにか、野外でも、室内でも歌を唄いながら遊んでいる子どもの風景は見られなくなったような気がします。

こういう歌は、子どもが群れて遊ぶという背景がないと生まれにくいかもしれません。逆にいうと子どもが群れて遊ぶことがないことを意味しています。

今回は、兵庫県下、たくさんの方々のご協力を得て、多種多様な「わらべ歌」を集めることが出来ました。これらの歌は、先人たちが残した貴重な文化遺産といえましょう。

その歌の中には、言葉そのものに強さを感じるものがあります。遊びの中で、拍子をとったり、囃しあったりした情景が目にかびます。

こういう“歌を唄いながら遊ぶ楽しさ”を、美しい日本の文化の一つとして後世に残していきたいと考えます。

くらしの中で、遊びの中で、大切にされてきた子どもたちの「音」として。

今回、ご協力をいただきました各市、町子ども会、教育委員会、老人クラブ、高齢者大学の皆様に厚くお礼申し上げます。

また、長谷坂栄治先生、浜岡きみ子先生には多大のご協力を頂きましたこと深謝いたします。

・わらべ歌

日本には、子守りの歌をはじめとして、遊びの時に唄う歌、年中行事や自然にちなんだ歌などたくさん
のわらべ歌があります。

これらの歌は、子どもたちのくらしや遊びの中での話し言葉が、自然発生的に一定のリズムとメロディ
を持ったものと考えられ、親から子へと口承で伝えられてきました。

つまり、年中行事などの口踊や運動を鼓舞する拍子、仲間に対しての掛け声などから発展していき、子
どもたちの集団生活の中で生まれ、洗練されて、今日まで傳承されてきたものと考えられています。

さて、わらべ歌の歴史を見てみますと、「万葉集」巻第13、雑歌に

三諸は 人の守る山 本辺は 馬酔木花開き
末辺は 椿花開く うら妙し 山ぞ 泣く児守る山 (3222)

という歌があり、この歌は子守唄のはしりであろうと考えられています。

また、同じく東歌に

相模路の 淘綾の浜の真砂なす 児らは愛しく 思はるるかも (3372)

という歌があり、北原白秋はこの歌を、母の子どもに思いを寄せる素晴らしい歌として絶賛したといいま
す。

わらべ歌をまとめて編集したのものとして最も古いものは、江戸時代の後期に行智という僧侶がまとめた
「童謡集」であるといわれています。

その中には、今回も収集することができた「お月さまいくつ」や「かごめかごめ」等の歌もふくまれて
いるのだそうです。それらの歌は、案外古くから傳承されてきたことがわかります。

現在残るわらべ歌の種類には様々なものがあり、そう単純に分類できないところがあります。

例えば、同じような歌詞でも遊戯の方法が違っていたり、同じようなメロディでも歌詞の内容が違って
いたり、また、特に子守唄の中には、むしろ子守り自身が慰みに歌う一種の労働歌と見られるような歌
もたくさんあるからです。

さらに、年中行事の歌、動植物、天候・気象に関するもの、囃し言葉からからかい歌にいたるまで、多
種雑多といえるでしょう。

・兵庫の地域性

神戸から阪神地域のわらべ歌は、京都や大阪の影響をより多く受けているといわれています。大阪を代
表する子守唄「天満の市」が瀬戸内を西へ、西播磨まで見られます。

播磨地域は、今回特に数多く情報を寄せていただいた地方の一つで、東播磨では京都や大阪に影響を受
けているものから、土地独自に育んできたものであろうもの、西播磨では岡山からの影響を受けているも
のもあり、物と人の広い文化交流が感じられます。

但馬地域のわらべ歌は、この地域が県下で最も近代化が遅れたために、古い形のわらべ歌が数多く傳承
されているといわれています。

但馬は、つい最近まで冬季出稼ぎが行われ、男性は阪神地域に酒造りなどに出て行った歴史があります。
また、女性は7～8歳になると、女中奉公や子守りに播磨や阪神間に出され、そのようなくらしが、様々
なわらべ歌に唄い込まれているといわれています。

丹波地域は、一説には「田の庭の国」ともいわれ、水田の豊かな地域でもありました。このため、豊か
な自然を唄い、おおらかな土の香りのするわらべ歌が多いといわれています。

